慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	江戸・明治期における小語彙集つき書簡作法書・その1
Sub Title	Handbook of letters with small vocabularies in Edo, Meiji era (1)
Author	関場, 武(Sekiba, Takeshi)
Publisher	慶應義塾大学言語文化研究所
Publication year	2020
Jtitle	慶應義塾大学言語文化研究所紀要 (Reports of the Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies). No.51 (2020. 3) ,p.65- 113
JaLC DOI	10.14991/005.00000051-0065
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069467-00000051-0065

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

江戸・明治期における小語彙集つき書簡作法書・その1

関　場　　武

はじめに

今更言うまでも無く、往来物と辞書・字典は近い関係にある。往来物に語彙集が搭載され、辞書・字典中に往来物が含まれたり合綴されたりしている例は相当多い。本稿では江戸時代のそれを恣意的に何点か挙げ、さらに明治期に多い漢語字類等の語彙集を付載した一連の往来物を紹介するものである。例によって、基づく資料は手近なものであるので、悉皆調査ではなく遺漏誤脱は当然ある。諒恕せられたい。資料掲載に当っては、フリカナや編集者・刊行者の居住地等の多くを割愛し、適宜句点を施したほか、異体字を通行の字体に改め踊り字・合字を開く等の措置を行なってある。

I

江戸期に刊行された往来物には「節用」を謳うものがある。「童朦日々節用之纂文字為文章者也」という元禄2（1689）年正月江戸・萬屋清兵衛開板の「節用字纂往来」大本2巻2冊もあるが、夙に知られ流布を見たものに（1）享保4（1719）年孟春初刊の山本序周編「文林節用筆海往来＜書札法式替文章盡＞」がある[註1]。同書は頭書に草木之分、鳥獣魚虫づくし、衣食道具づくし、人倫支躰づくし、天地時節つくしの5部からなる「節用字づくし」（各イロハ順）および「文章用捨之聞書抄」、「異名盡＜これハ書かへの文章又ハこばして書時用ゆ＞」を搭載する。享保6年孟春版や、同18年8月、宝暦11（1761）年正月版等の大本があり、また改題遞修本として「文林節用筆海綱目＜書札法式替文章盡＞」（延享4＜1747＞年9月版、寛政11＜1799＞年正月版）、「文林節用筆海大全＜書札法式替文章盡＞」（天明7＜1787＞年3月版、

『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第51号（2020）pp.65~113

文政元＜1818＞年補刻本、同求板本）があり、いずれも大本1冊である[註2]。

また、比較的近年に山田俊雄氏によって紹介され、世間に知られるようになった（2）中村平五三近子編「一代書用筆林寶鑑」大本1冊がある。享保15（1730）年七夕版や寛延3（1750）年青陽（＝1月）版がある同書は、佳節門、祝儀門～工商門、三教門までの10門に計222通の比較的短文の書状・文書類を載せ、前付・頭書にも様々な情報を収載している往来物であるが、全213丁中、本文第39丁ウの頭書から始る「書面走廻用字」が注目される。「節用字盡のもやうと違ひ、毎日書面入用の手近き文字をあつめて、今日 仰書又ハ手紙等の急用にそなふ」「又用字の内に、いたりて近かき。殿。様。内。外。候。又。一十百千万、無事。貴様。目出度。上下などいへる字。数百字ありといへ共、今日かな本にても、用文章をみる程の人、右の類の近き字、一代に一度も引みる事なくみな覚え居ことなれバ、これ又一字ものせ置ず」として、魚類の部、貝の部～天地部、言語の部（イロハ分け。＜いやまし＞弥増。＜いとふ＞厭。～＜すさけ＞素酒。＜すきうつし＞透寫。）の14の部に分けて搭載する語彙集である。これについては「成城文藝」72（昭和50）や中公新書「日本語と辞書」（昭和53）の山田氏のご論考にお任せすることとするが、節用集に対する批判はそれまでにもあり、また後発の節用集が前版のものを云々することも、自著の優位性を謳うために、前書きや序文で普通に行なわれていた。

例えば宝永7（1710）年初夏刊損軒貝原篤信編「和俗童子訓」（安永2＜1773＞年9月再版本等アリ）巻之四には「世俗ハ通用の文字を知るに、順和名抄、節用集、下学集などを用ゆ、順和名抄ハ用ゆへき事多し、又あやまり多し、功過相半なり、節用集、下学集ハ誤多し、用ゆへからす」と厳しい評価があり、寛政12（1800）年正月刊「俗書正譌」の題言（寛政10年春・湖東布山叟鷺石把筆）では、「我カ國俗間通用の字書節用集ノ類のもの、往々世に發行せしむ、其ノ中間譌リを傳へて、童俗を惑はす事少ナからず、能クク校正して後用ふべし」と断じている[註3]。

その他、往来物と節用集との接近を示すものとして二、三、例を挙げると、元禄5（1692）年刊苗村丈伯の「世話用文章」（上・中巻）と「世話字

節用集」（下巻）の大本3巻本がある。これについては以前考察したことがあるので[註4]、もう一つ宝暦11（1761）年9月刊の（3）「書札節用要字海」大本半切横本1冊を挙げておきたい。同書は終丁オ本文末の刊記に「寶暦十一辛巳歳九月吉辰／皇都書房　堀川通高辻上ル町・植村藤右衛門／同書林　寺町通四条下ル町・植村藤次郎／江戸書舗　通石町三町目・植村藤三郎」とあるのが初版で、それを「寶暦十一～植村藤右衛門」のみを残して（但し新刻）重線を置いて左に「寛政九丁巳歳青陽良辰／訂正再刻大新板」と出し、ウラに「先板天明戊申の災に亡失して後、此本しばしば世に乏しくなれり、慈に於て索捜の人少からず、故に今是を求め、再度訂正をくわへ、字の謬誤を革め、精彫せしめ、以て諸人の需に應じ、猶更四方に流布せしむるもの也」という版行理由を記し、重線を置いて左に「彫刻司　丹羽庄三郎／樋口源兵衛／畑九兵衛／田原重兵衛／林清兵衛」の5名、さらに重線を置いて左に「江都書林　須原平助／浪芩書坊　吉田善藏／名古屋書肆　風月孫助／皇都書堂　朝倉義助／同書舗　中西卯兵衛」と5名の出版書肆を列記するのが寛政版である。初版もそうであったが、書林としたり書舗としたり、ご苦労なことである。

首尾相整っている寛政版をもとに、もう少し書型を著録すると、封面は「伊呂波引合文」、扉：飾り枠内に「書札節用要字海＜訂正監刻＞」、ウラに寛政丁巳春、中西坦興誌の序文、次いで「十三門部分之註」、「世宝用文章目録」がある。

全体は頭書に用文章等、下部に節用集という2段仕立てになっており、内題は、頭書が「世宝用文章」、下段が「書札節用要字海」。尾題は共にナシ。柱刻：白口、上部に「書札節用集」、下方○に丁付が基本型。初丁は「序」と丁付のみ。二～四は「書札節用集目次」。丁付：○一～四、○一～九十、九十一ノ百、百一～百十九、百廿ノ三十、百卅一～百卅九、百四十ノ五十、百五十一～百八十九、百九十ノ九十五、百九十六～二百終。

（節用）二行両点、9行。い・乾坤：乾。雷公。雷。～す・言語：屑。勝。優。

（頭書）佳節門：年始ニ遣文、同返書～歳暮之文、同返書54通、祝儀門32

通、宮室門8通、遊興門24通、寺社門20通、凶儀門19通、花木門10通、雑章門：振舞之文、同返書～常之見廻状130通（末に「用文章終」とあり）。手形證文尽15通、中興武将傳、改正御武鑑、日本廣邑、年代六十圖、願成就日、十二月異名、不成就日、十干十二支、判形相生、篇冠字盡、御改正服忌令、献立、名頭字、封状上書高下、京師九陌横竪小路と狭い紙面に色々な情報を入れ込んである。

また、(4)「孝經童子訓」は巻頭の3丁に亙る口絵「前訓之圖（ぜんくんのづ）」「書學之圖（てならひのづ）」「文房之圖（ぶんぼうのづ）」が人目を惹く「孝経」の平易な和解書であるが、後述するように脇題簽に「節用」の文字が見え、頭書にある様々な情報が、生活小百科としての「節用」の性格を帯びていることを示している。書型を記すと、大本一冊、上河正楊（河子鷹）編、下河邊拾水書・画。安永8（1779）年正月　京都書林　堀川通綾小路下ル町・銭屋庄兵衛、寺町通蛸薬師下ル町・秋田屋平左衛門、二条通麩屋町東へ入町・山本長兵衛、二条通堺町東へ入町・八文字屋仙次郎、烏丸通松原下ル町・炭屋勘兵衛刊。（＊自跋は安永9年秋7月）。他に天明元年5月弘章堂山本長兵衛、麩屋町通三条上ル二丁目・近江屋治郎吉版、文政7年5月補刻山本長兵衛・摂陽書林河内屋新次郎版（題簽角書＜大成頭書＞）、嘉永6年9月江戸・岡田屋嘉七、大坂・河内屋喜兵衛、同・河内屋新治郎、京・俵屋清兵衛の「三都會書林」版、封面には京摂書林謙々舎、積小館合梓とアリ）がある。安永版、天明版封面にある平安書鋪・弘章堂、循古堂とは、それぞれ金屋山本長兵衛、近江屋上河治郎吉のことであるが、嘉永再板本封面にある京攝書林・謙々舎、積小館は未詳。

＊安永版や天明元年版、文政7年補刻版の脇題簽は「頭書節用目録」として、「前訓之圖」～「十二ケ月異名（文政版は「十二月の異名」）」までの33の搭載項目を有界11行3段で示す。ことばに関わるものとしては「童子日用字類（どうじにちようじるい）」と題し諸道具類、衣服織物類、諸木之類、草花類、野菜之類（やなやもののるい）、諸魚并貝類、諸鳥之類、諸獣之類、諸虫之類の9類を挿絵入りで挙げるもののほか、「大日本畿内七道國名」、「諸姓氏抜萃」、「＜五性配當＞男女俗称字類（なんによのなのじるい）、「小児病名畧（こどもやまひのなのあらまし）」、「三躰以呂波（さんていいろは）」「唐以呂波」「中夏歴代國號」「十二月異名」等がある。

他にも頭書に「節用四季部分字盡（せつようしきぶわけじづくし）」「諸用部分字盡（しようぶわけじづくし）」を搭載する明和5（1768）年刊の「文寶用文章字盡大成」（柱刻：明和新刻用文章）や文化元（1804）年求板の「文海用文萬字宝鑑」（柱刻：天明新刻用文章）、頭書にイロハ分けの語彙集を大量に載せ、巻末に部類別のそれを付載する享保18（1733）年の「文花節用書状袋」、明和2年正月求版の「書札節用文章」等を紹介すべきであろうが、論考の都合上次回にまわすこととする。

Ⅱ

さて、ここまで、江戸期の往来物と節用集のつながりを略述して来たが、以下本稿の主題：明治期における語彙集搭載の往来物、書簡作法書について、内容紹介を進めて行くことにする。なお、項目数を挙げているケースもあるが、お上がする意図的なそれとは違い、単純な数え間違いをしでかしている場合もあると思われるので、概数として見て頂ければ幸甚である。

1）．小川為治・＜頭書布告字辨＞日用文諸證文（封）

半紙本2冊

表紙：濃紺色地紙に網目模様空押し

題簽：（上冊）子持ち枠付き短冊形白紙、「＜頭書布告字辨＞小川為治著／日用文　全」。（下冊）同「＜頭書布告字辨＞小川為治著／諸証文」。

袋：　子持ち枠、タテに3ツ割。中央欄に「＜頭書／布告／字辨＞日用文諸證文」と題名を出し、界線を置いて右に「小川為治著」、左に「＜明治七年甲戌／五月新刻＞名山閣發信」と記す。右肩に魁星印、書肆名下方に「名山閣發兌」の小型朱印。

封面：黄紙、袋と同文。印はナシ。

目録：（上）目録、（下）諸証文目録」。

内題：（上）頭書欄に「布告字辨／イロハ引」、本文に「日用文／小川為治著」とアリ。（下）は「諸証文」とあり。

柱刻：頭書はオに「布告字辨」の名と㋑の如き〇で囲んだイロハ分け（下131マデ、以下はイロハ分け標目ナシ）、黒魚尾を置いて下方に「日用文」（下

冊は「諸証文」)、二重線を置いて下オモテ側に丁付。丁付：(上) 一〜六、一〜百九、(下) 百十〜百五十四。丁数：(上) 115、(下) 45。

刊記：

(A). 後ろ見返し子持ち枠付匡郭内右方に、大阪・河内屋喜兵衛〜秋田屋市兵衛の7名、西京・出雲寺文次郎〜杉本甚助の4名、東京・須原屋茂兵衛〜三家村佐平の11名、計三都22名の書肆を上下2段に列記し、界線を置いて左に、「東京芝大神宮前書舗／名山閣和泉屋吉兵衛發售」とする。これは袋、封面に「名山閣發信」とあるに合致する。

(B). 下冊後ろ見返し匡郭内に住所付きで、大坂・河内屋喜兵衛、伊丹屋善兵衛、東京・山城屋佐兵衛、須原屋伊八、椀屋喜兵衛、和泉屋市兵衛、和泉屋吉兵衛の二都7名を列記し、最後の和泉吉の下に「版」と出す。

頭書「布告字辨」は上冊：一新(イツシン)〜109ウ上梓(ジヤウシ)までの4035項目、下冊：110オ上刻(ジヤウコク)〜132オ1行目垂拱（訓ナシ）まで398項目を上下2段に示す。合計4433項目。132オ2行目に「布告字辨終」と尾題がある。因みに最終項「垂拱」には「天子御手ヲコマヌキ、賢良ノ諸臣ニ任セテ天下ヲ治ム」と注がある。他の項目にも見出し下にカタカナで意味等の注がある。

以下「事物異名」が書拜、臺下〜舩、附の大きく10類に分けて終丁まで続く。最後の「附」は、ハクサン（白粲）ハクマイ、ベイセツ（米屑）コヽメ以下フヒ（腐皮）ユバ、フンキン（麪筋）フまでの17語が並び、標題は無いが穀類、食類関係のものがばらばらに載っている。81項目に計597の異名が例示されている。

本文：上冊巻頭の「目録」によれば、歳首(ねんしゆ)之文、右ニ答る文〜休日遊歩を促す文、右ニ答る文の64通。行草体、平仮名付訓、左にカタカナ左注、稀に訓点あり。下冊は同じく巻頭「諸証文目録」によれば、借用証文〜借地証文の19通に地所規則、諸品賣買取引心得方規則、代理人規則、受取諸證文印紙貼用心得方規則節畧の4種。規則の方は楷書・カタカナ、振り仮名・左訓付き。127ウ頭書欄外に1箇所だけ「天災トハ地震洪水ノ類ナリ」との注がある。

2). 小川爲治郎・開化漢語用文

半紙本1冊　表紙：濃紺色布目地紙

題簽：子持ち枠付き短冊形白紙、「＜小川爲治郎編輯＞開化漢語用文　全」。

袋（A）：子持ち飾り枠内を重線でタテに3ツ割。中央に書名、右欄に「小川爲治郎編輯／梅素宮城玄魚書　版權免許」、左に「東京書肆　松林堂梓（朱印記：東京書肆松林堂發兌）」。右上に魁星印風朱印あり。

封面：黄色地紙に巻物風の意匠。中央に書名、右に「小川爲治郎編輯／楳素宮城玄魚書」、左に「東京書肆　案林堂梓（印）」。右上に魁星印風円朱印。（C）は字体が異なり、「楳」が「梅」、左の書肆名が「松林堂」。

目録：「標目」として「初丁・年始の文」～「百廿八・盗賊届書式」、「頭書目録」、「附録」を出す。

内題：「頭書　作文之部」のみあり、本文部分には無し。

柱刻：黒魚尾の下に「開化漢語用文」、下方に丁付。丁付：目録一～四、一～百廿八大尾。

刊記：（A）．128ウ匡郭内、右方に「版權免許　明治九年九月廿一日／出版同十年五月」、界線を置いて左に「編輯人　第十大區貳小區千束村廿四番地東京府平民・小川爲治郎／出版人　第壹大區拾四小區通油町六番地　同・水野慶次郎」とある。次いで1丁半に亙り大阪備後町南エ入・河内屋龜七～両國米沢町・髙橋松之助までの90名の書肆を上下2段に列記する。4＋128＋1丁半。序欠落か。

（B）．同「版權免許　明治九年九月廿一日／再版御届　同十二年十一月十九日／出版　同十三年一月」、界線を置いて左に「編輯人　北豊島郡千束村廿四番地　東京府平民・小川爲治郎／出版人　日本橋區通油町十四番地　水野慶次郎」とある。

次丁から2丁半に亙り陸前仙臺・伊勢屋安右衛門～東京書林・田中要次郎までの120名を有界12行上下2段に列記する。2＋4＋128＋2丁半。Aのかぶせ彫り。序文に明治十年夏六月の年記あり。

（C），中本1冊。「版權免許明治九年九月二十一日／別製本御届明治十一年四月八日／定價四十錢／編輯人　北豊島郡千束村廿四番地　東京平民・小川爲治郎／出版人　日本橋區通油町六番地　東京平民・水野慶次郎」。（B本の改

刻)、2＋4＋128＋2丁半。次いで2丁半に亙り大阪備後町・小谷卯兵衛～同（東京）両國米澤町髙橋松之助に至る120名の書肆を有界12行上下2段に列記する。序文はBと同じ。

頭書：「作文之部」として簡端、起居～称謂、雑語に至る33類に分けた書簡・作文語句・類語を載せ、證券印税規則節畧～死去届書式の6種の附録、計39章を掲載。楷書・カタカナ表記で、多くの語句に訓み、語注を付す。

本文：行草体。5行、ひら仮名の振り仮名と、カタカナの左訓。77オ～80オの「地所質入書入規則節畧」、84オ～94オ「建物書入質規則」は楷書・カタカナ。その他注・解説も間々楷書・片仮名。年始の文～友人ニ寄る文、同返事までの45通、送状・證文類の51例を掲載。

3)．松木平吉・＜維新＞開化用文

中本1冊　表紙：黒色地紙に紗綾形模様空押し。

題簽：子持ち枠付き淡香色短冊形紙。「＜松木平吉編輯＞開化用文　全」。

封面：飾り枠内。床の間中央に「開化用文／枩木編輯（印)」と書名・編者を示す掛け軸、左前方に、梅が枝・水仙投げ入れの花瓶、右前方に「松寿堂版」と版元を示す本箱と地球儀。

序：漢文・草書体、自序。序のウラ面に白ヌキ題字あり。

内題：＜維新＞開化用文／東京　枩木平吉編輯」。13ウに諸證書文例」。

尾題：用文章畢」、諸證書文例終」。

柱刻：白口、下方に丁付。丁付：一～廿九。序には無し。1＋29＋奥。

刊記：後ろ見返し匡郭内、右方に「明治九年三月廿日御届／版權免許同稔五月十五日　編輯兼出版人・柗木平吉　両國吉川町貳番地」と出し、界線を置いて左に「日本橋通一丁目・須原屋茂兵衛、芝三島町・和泉屋市兵衛、通油町・藤岡屋慶次郎、馬喰町二丁目・森屋治兵衛、仝・山口屋藤兵衛、両國吉川町・大黒屋平吉版」と6名の書肆を列記する。大黒屋はすなわち松木のことである。

頭書：①「尺牘字類」として「(いうとうひらい）郵筒飛来・イウビンガトヾキタト云フ、(いうじよ）宥恕・ツミヲワビル、(いんじゆん）因循・グ

ヅグヅスル」以下13オまで「（えいこうあふれみに）栄幸溢身難有（こうじん）幸甚・ヒトノコヽロノアツキニカンジルコト、簡末ニ用ユ、（びんしやう）憫笑・オワラヒ、（せいねん）省念・アンシンスル」の176項目を、イロハ順に挙げる。末に「尺牘字類終」とある。平仮名訓、楷書、カタカナ語註付き。

②「諸證書類心得」（明治4年辛未正月18日御布告）、「出訴期限規則之略」（明治6年11月5日第362号御布告）、各大區々長ヨリ申立町規（明治9年1月8日）ほか。楷書体、カタカナ混じり。

本文：行草体、平仮名付訓、稀にある左訓はカタカナ。一二点、レ点あり。

①年始之文～悔吊之文18通。末に「用文章畢」とあり。（「商法の文」だけ3通ある）。

②「諸證書文例」。「金圓借用證」～「賊難御届」16通。末に「諸證書文例終」とあり。

＊黄色地紙に紗綾形模様空押し表紙の後印本アリ。

4）．松木甫竹・＜維新＞開化用文

中本1冊。濃紺色表紙。題簽：子持ち枠付き短冊形白紙、「＜維新＞開化用文　全」。

封面：匡郭内を界線で2段に分け、上段に「新暦年中季候の辨（しんれきねんぢうきかうべん）」、下段に「手簡往復自他の稱（しゆかんわうふくじたせう）」を記す。「新暦年中季候の辨」は一月　寒入て甚寒～十二月寒冷、向寒、「手簡往復自他の稱」は「人の手簡」：尊書、尊翰、玉章、貴札、朶雲～「自の妻」：荊妻、山妻を振り仮名付きで挙げる。

内題：＜維新＞開化用文／東京　松木甫竹編輯」。19オ「諸證書文例」。

尾題：18ウ「開化用文終」、終丁ウ「開化用文諸證文終」。

刊記：後ろ見返し匡郭内右方にアルファベットの大文字ローマ字体と筆記体小文字をカタカナ振り仮名付きで有界7行4段に挙げ、さらに筆記体ABCの下にpパピプペポ、hハヒフヘホの如く日本語の50音をカタカナ小文字で記す。そして界線を置いて左に「東京書物問屋　両國吉川町・大黒屋平吉版」と版元名を出す。刊行年月は無い。

柱刻：白口、下方オに丁付のみ。丁付：初丁には無く、二〜三十。丁数：30＋奥。

頭書：＜新撰＞漢語熟字解」とあり、いゐの部：一新・しんきになる、一定・ひとつにさだまる〜すの部：數学・そろばんのけいこ、随意・きまゝまでの433語。末に「熟字解終」とある。維新・ごかいかく、陛下・天子のおんことをいふ、洋服・せいやうふうのきもの、姑息・いつすんのがれ等が載るが平凡。

本文：開化用文の方は年始之文〜社中を會せる文までの30通、證書文例は金子借用之証〜離別状までの9通。3に似通うところもあるが別文である。

奥付のアルファベット表もそうであるが、病氣見舞之文に「洋糖（はくらひのさとう）一瓶、聊御見舞之印迄ニ呈候」とあったり、商法之文に「今般英國商船一号及び和蘭船数艘入津之由、今朝電報有之候間」とあるなど、新しさを盛り読者の気を惹こうとしている様が窺える。

5）．原田道義・＜開化日用＞文證大成　全二冊。

半紙本2巻2冊　表紙：黒色地に紗綾形模様空押し。題簽欠。

封面：朱色地紙に飾り枠、重線でタテ3ツ割。中央欄に「＜開化日用＞文證大成全二冊」、右に「原田道義編輯／青木東園淨書　明治十年／増訂再刻」、左に「明治九年／二月三日／版權免許　東京・青藜閣藏梓」と記す。

序：題辞の後に明治八乙亥稔第二月上澣、識于浩然樓南牕、原田道義（印・弍醒斎）の漢文体序があり、東園逸人書（印・理中）、匡郭外ノド下方に「序文刻　木村晋三」と記す。凡例：漢字、カタカナ混じり文。原田一醒齋再記（印・道義）、上埜東暁書。

目録：（上）＜開化日用＞文證大成上之巻：用文作例目録、鼇頭作文摘語上目録、（下）＜開化日用＞文證大成下之巻：證券格例目録、鼇頭改正御布告傍訓、證券印税規則、作文摘語下巻目次。末に「上巻（下巻）目録畢」とあり。

内題：（上）作文摘語、＜開化日用＞文證大成／東京・原田道義編輯／青木東園書」。巻分け表示は無い。（下）も巻分け表示無く、角書きフリカナ「にちえう」、青木理中書。頭書は「改正御布告傍訓」。

尾題：（上）作文摘語上巻畢、＜開化日用＞文證大成　竟」、（下）作文摘語竟、＜開化日用＞文證大成巻之下畢」。

＊目録、内題、尾題とも、著録したように表記に出入りがあり煩雑になっている。

柱刻：文證大成（黒魚尾）巻上（下）、重線を置いてオモテ側に丁付。上、下の巻分けの代わりに序は序一、序二、目録は目録上、目録下とあり、題辞、凡例には表示が無い。また、巻下後ろ見返しは柱刻が無い。題辞、序は丁付無く、凡例には「文證大成」の表示無く丁付のみ在る。

丁付：（上）凡例：一～三、目録：一～七、本文：一～百十八、（下）目録：一～五、本文：一～百六十四了。丁数：（上）1＋2＋3＋7＋118、（下）5＋164＋1。

刊記：巻下、最終丁ウを縦線で5行に割り、右から「明治八年第四月二十三日官許／明治九年第二月三日版權免許、編輯：醒齋原田道義、淨書：東園青木理中、鼇頭助筆：門人　上巻・上野東暁／下巻・奥隅静園、東京書肆　青藜閣・北澤伊八版」とし、後ろ見返しに、上部に「東京書林」と出し、下方に北畠茂兵衛、稲田佐兵衛、小林新兵衛、中村佐助、牧野吉兵衛、山中市兵衛、太田金右衛門、林萬次郎、青山清吉と9名の書肆を列記し、最後に北澤伊八版と止める。

頭書：カタカナ楷書体、有界9行。（上）「作文摘語」。伊・（イワヒ）祝：（カシユク）嘉祝・ヨロコビイハヒ、（カギ）嘉儀・ヨロコビノギシキ…、同・（ヒト）他ヲ（イワフコトバ）祝詞、（キヨウシユク）恭祝・ウヤウヤシクイワフ…～寸・（スクナシ・スコシ）少：（トガウ）兎毫・ウノケホド、（センサ）淺瑣・ソマツデスコシ、（シヨウヱウ）松葉・スコシノコヽロザシ。429語。イロハ各部の末に「通用助字」をまとめて載せる。例えば伊は（イタツラニ）徒～（イダク）抱の23字、也は（ヤ）哉～（ヤガテ）頓の16字、寸は（スコブル）頗～（スム）澄の35字で、総計562字。末に「此他下巻ニ詳出ス、伊呂波部類終」とある。

以下様、殿、君等の「表書人名下稱呼」が実例とともに掲出される。

（下）はじめ34丁は「改正御布告傍訓」「証券印税規則」が載り、35オ～「前

ノ續キ」として「作文摘語」が載る。上巻と異なり凡例にあるように部門分け：天象、時候、地理、居所、人倫、人事、飲食、衣服、器財、身體、疾病、禽鳥、走獣、昆蟲、魚類、甲介、草木、數量の18門である。例えば天象門では、（テンキアヒ）天氣相として、（クワイセイ）快霽、（セイロウ）晴朗、（セイジツ）晴日を載せ、時候門：（セイボ）歳暮として（サイマツ）歳末、（ネンビ）年尾、（サイセウ）歳抄を注付きで載せるといった具合である。
なお、⑰の草木門は部門注に「カズ多キユヘニ、イロハガナヲ以テコレヲワカツ」としてイ：（イヌタデ）葒・又蒙籠、（タイリヨウ）大蓼・イヌタデ、（ジンマ）蕁麻・イラクサ～ス：（カン）菅・スゲ、（セツ）薛・同を載せ、次いで「草木稱呼」として、樹木・キ材～（カシヨク）稼穡・ウユルカリコム、（バイヤウ）培養・ツチカヒ、⑱数量門として多寡、幾許～歳時量度：一抄（ママ）、一分～一季、一歳を載せ、千秋萬歳と止める。
本文：（上）年始之贈書、新年之回報～賀新宅之文、祝遐齢之辞の61通と、追加の詩歌贈寄之副詞、（下）證券格例：受取書類～届書類の5種114例。平仮名振り仮名付き行草体。上巻は5行、下巻は6行。上巻の書簡には諸所にカタカナ左訓あり、返り点も見ゆ。

6）．原田道義・＜小學習字＞開化用文證
半紙本1冊
（A）．表紙：濃紺色布目地紙。
題簽：子持ち枠付き薄黄色短冊形紙に「＜原田／道義／編著＞＜小学／習字＞開化用文證　完」。
封面：黄紙に飾り枠、タテ3ツ割。中央に「＜小學習字＞開化用文證」と書名を出し、右に「原田道義著／青木東園書　日要必携」、左に「＜明治九年／九月一日／版權免許　東京書肆＜香芸堂／松延堂＞發兌」と記す。松延堂は刊記に言う大西庄之助のこと。香芸堂は未詳。
序：桃色枠内有界9行、漢文体、開化用文證序（明治九稔第十月中澣、抽毫于浩然樓之南牕、原田道義、東園青木隆書）。
凡例：漢字カタカナ交じり文、有界10行。末に「一醒齋逸史再識（印・原

田)」とあり。

目次：「開化用文證目録(かいくわようぶんしやうもくろく)」。「用文之部」と「證券之部」に分け、前者は歳旦之祝帖～祝年賀之壽詞の56通、後者は金銀受取之例～水陸送状之例の14例を挙げる。また「鼇頭」として「聚語成文(シユウゴセイブン)<左訓：コトバヲアツメテブントナス>」のイロハ分け丁数、および時候之部～時期之部等4部の所在丁数を示す。末に「總目録畢(さうもくろくおはる)」とあり。

柱刻：本文部分は上部に「開化用文章」の題名、下方オに〇一～百十六の丁付がある。また、上部オに検索の便を考えて陰刻カタカナで、イロハ分けの指標を出す。(はっきりとしていて見やすい)。なお、序文の丁は書名・〇印が無く、凡例および目録には題名の下に「例目」(3丁目は「例日」と誤刻)とある。丁数：2＋4＋116＋奥1丁半。

内題：(頭書)聚語成文(シユフゴセイブン)、(本文)<小學習字(せうがくしうじ)>開化用文證(かいくわようぶんしよう)／東京・原田道義著／青木東園書」。

刊記：巻末匡郭内。右方に「明治九年九月一日版權免許／同　十一月出版　定價四拾五錢」と年記及び販売価格を記し、界線を置いて左に、「編纂人　東京第五大區五小區　浅草新猿屋町七番地・原田道義／出板人　同第壹大區十四小區奈島町壹番地・書肆大西庄之助」、界線を置いてさらに左に「浄書　青木東園(印・理中)／鼇頭助筆　真藤東圃(印・東圃)」と記す。また、その奥付のウラと後ろ見返しには、「三府發行書林」として、西京・勝村治右衛門以下3名、大阪・河内屋喜兵衛以下6名、東京・須原屋茂兵衛以下川越屋松治郎までの23名、総計32名の書肆を住所付きで列記する。

尾題：頭書は「聚語成文畢(シユウゴセイブンヲハル)」、本文は「開化用文證終(かいくわようぶんしようおはる)」とある。

頭書「聚語成文」は楷書体、カタカナ付訓・語注付きイロハ引き2字熟字・類語集。検索の便を考え2字目までのイロハ指標を頭書欄上部枠外に示す。有界10行。

＊「凡例」に

本編ハ幼學後進ノ為ニ。文通自作ノ書タランコトヲ欲ス。故ニ(ウヘノダン)鼇頭ニ、(イロハガナ)伊呂波假字ヲ以テ。書簡ニ用フル熟字ヲ(アツ)集ムル。(オヽヨソ)大凡五千ン(ヨゲン)餘言ニ至ル。是従前

ノ俗語ヨリシテ。漢語ヲ（ミダ）撿出スノ躰裁ナレバ。（ブンイン）文音ヲ記スノ（トキ）際ニノゾ（臨）（まま）テ。コヽロ（意）ニ思ヒ設クル所ノ辭ヲ（カナ）國字ニテ捜リ求メ。一句一章ヲ綴リ成セバ。（タチマチ）條忽一文章ヲ作リ得ベシ。

假令バ（ヨロコ）悦ビハ「ヨロ」ノ（ブ）部ニ（ヒ）引キ。（メデタク）目出度ニ（アタ）充ル（ジュクゴ）熟語ハ、「メテ」ノ部ニ（モト）索ムルガ如シ。因テ（シユウゴセイブン）聚語成文ト（ナヅ）號ク。

○（コノホカツネニイフトコロ）此他平素言所ノ俗語平話ニ（アタル）中ベキ。漢語熟字ヲ選聚メ。（モンセイキンガク）門生勤學ノ一助トス。

此編ニ漏レタル文辞ハ。拾遺増補シテ詳載シ。近キニ刻シテ全部トス。（ミルヒト）覽者前後ヲ照シ（アハ）合サバ。座右ニ於テ遺忘ニ備フル。（ハヤビキシウセイ）捷引集成ノ一書ナラン乎。

とあり、その趣旨と検索法は明らかである。

頭書：イ（伊）・【イハ】（イハヒ）祝賀之（コトバ）辭：（キヨウシユク）恭祝・ウヤマヒイハフ、（クワフ）惶祝・オソレナガライハフ、キヤウ（恇）祝・同～（シユクシ）祝贄・イハヒノオクリモノ、（シギ）贄儀・同シンモツ、（ケイヘウ）慶表・イハヒノシルシ、【イロ】（イロンナクコレ）異論無之：（ズベカラアルイギ）不可有異議・カハツタイヒブンナシ、（カツテナシシユセツ）曽無殊説・同上～【スミ】（スミヤカ）速：（シソク）駛速又（センソク）遄－又（シユンソク）俊－、【スス】（スヽム）進：（エイシン）鋭進又（シンシン）駸－又（シンポ）進歩、（スヽメル）勸：（クワンシヤウ）勸奬・同、（シヤウヨウ）慫慂・同

②時候之辭（ジコウノコトバ）：（ネンシ）年始～（セイボ）歳暮

③稱呼之部（トナヘノブ）：（ソフ）祖父～（ザウ）雜

④尊稱（ソンシヤウ）：テガミノ上ガキナドニシタヽム、（タイクン）大君～（センシ）仙史

⑤時期之詞（ジキノコトバ）：トシツキヒトキノルイ、（ハクコ）邈古～（センシウバンザイ）千穐萬歳

本文：行草体大字5行。平仮名の振り仮名とカタカナの左訓、訓点を付す。目録「用文之部」から標題を若干あげると、5. 野歩誘引（やほゆふいんのしよ）＜左訓：ノガケサ

ソヒ＞之書、9. 出梅新霽之手簡、17. 菊圃遊覧之誘書、22.雪中贈詩之牘、27.婚媾を賀する之書、28.同受室之應答、35.商法開舗＜ミセビラキ＞之告書＜ツゲブミ＞)、51.諸祝儀饋赤飯之書など、凡例に「幼學後進ノ為ニ」と言いながら、硬い標題・文面が目につく。

(B). 表紙：黒色布目地紙。封面の左欄にあった年記が「明治十一年第四月再刻」となり、刊記の右方の年記が「明治九年九月一日版權免許／同十一月出板／同十一年四月廿九日御届再板」と3行になる。そして、「三府發行書林」のうち、最後から2番目の「横山町三丁目辻岡屋文助」が、本銀町二丁目和泉屋孝之助」に代わる。

＊かぶせ彫りではなく、A本の忠実な翻刻か。

7). 津田秀林・＜習字＞新體用文章

半紙本1冊

表紙：黒鼠色地紙に紗綾模様空押し。題簽欠。

封面：萌葱色子持ち枠内に同じ色で印字。重線で真中が広くなるようにタテに3ツ割。中央に「＜習字＞新體用文章全」と書名、右に津田秀林編〔輯〕、左に「東京書肆　薫志堂藏版」とある。薫志堂はおそらく井上勝五郎、この封面と奥付のみ安価な洋紙。

序：ナシ。

凡例：6.原田道義・「＜小學習字＞開化用文證」のそれを流用。「一醒齋逸史再識」の署名も、その下の「原田」の印記もそのまま残す。

目録：6の標題「開化用文證目録」の「開化用文證」を削る。位置はそのまま。

柱刻：6の「開化用文章」の「開化」を削り「用文章」のみ残す。丁付はそのまま。第九十七丁だけ「用」まで削ってしまい、「文章」のみが残る。

内題：著者、書工の名も削り、新たに「＜習字＞新體用文章／津田秀林」と入れる。

尾題：6のそれに替え「＜習字＞新體用文章終」とする。

刊記：新たに付け替え、右方に「明治二十五年六月八日印刷／同二十五年六

月卅日出版」と年記を出し、界線を置いて左に「編輯者　東京京橋區南鍛冶町廿一番地・津田鎗藏／印刷兼發行者　東京京橋區南紺屋町壹番地・井上勝五郎」とする。

＊31、32、43丁目のように6Aに近い様相を見せたり、補刻を行なったのではないかと思われる個所もあるが、111ウ上部の囲み枠の切れを含め、全体として6Bの杜撰な遞修・後印本と見てよいであろう。(註3)

8)．原田道義・＜書牘確證＞帝國文證大全

(A)．半紙本2巻2冊

表紙：黒布目地紙に案、林といった文字や松葉等の空押し模様。

題簽：子持ち枠付き短冊形白紙。「＜原田道義編輯＞＜書牘確證＞帝國文證大全上（下)」。

封面：黄梨地紙に子持ち枠。上部に「書牘確證」と右横書き、下に2行に分けて篆書体で「帝国文／證大全」と書名を出す。

序：帝國文章大全序（明治十一年一月源義廉)」。漢文草書体。

凡例：明治十年第十二月中澣　浩然樓ノ南窻ニ於テ　著者・原田道義謹識」。

目録：帝國文證大全巻之上：書牘文例目録（ショトクブンレイ）（時令之部～雑事之部の5部)。末に「書牘文例目録終」とアリ。鼇頭・聚文接辭（シウブンセツジ）（言語門～數量門までの12門)。末に「聚文接辭目録畢」とアリ。巻之下／證券文例目録は證書類文例～届書類文例の3種。末に「文證大全目録下之巻終」とある。

内題：＜書牘確證＞帝國文證大全巻上（巻下）／東京・原田道義著／伊藤桂洲書」。

尾題：帝國文證大全巻上（巻下）終」。

柱刻：黒魚尾の下に「帝國文證大全巻上（巻下)」、その下方オモテに丁付、子持ち界線を置いて「松林堂藏版」。

丁付：(上）序文には無し。目一～七、一～百卅四、(下）目一～七。一～百四十八、(奥付）一～二。丁数：(上）1＋7＋134、(下）7＋148＋2丁半。

刊記：下巻終丁ウ匡郭内。右方に「明治十年十二月六日版權免許／同十一年一月出版　定價壹圓」。界線を置いて左に「東京第五大區五小區淺草新猿屋

町七番地・著者　原田道義／同第一大區十四小區通油町六番地・出版人　水野慶治郎」と記す。次いで上部に右横書きで「諸國（囮）發行書林」として、2丁に亙り、大阪心齋橋通備後町・小谷卯八郎～野州太田原・田代太良三郎の40名、後ろ見返しに「東京發行書林」として、日本橋通一丁目・北畠茂兵衛～通油町・水野慶次郎までの10名、あわせて50名の書肆を列記する。

頭書：凡例に「本編専ラ主トスル所。幼童文作研修ノ為ニ。自習獨學ノ書トスルニアリ。故ニ上巻初章ヨリ八十章ニ至ル迄。下文ト鼇頭トヲ照準シテ。文音ヲ作ルニ便用トシ。尚上段ノ八十三ヨリ百四十八ニ至ル迄。十二部門六十六号ニ分類シ。書牘ニ用ユベキ（レンゴ）縺語ヲ記シテ。（スミヤカ）駸速ニ捜索スル。作文（セフイン）捷引（＊左訓：ハヤビキ）ノ便宜ニ供フ」とあり、またその冒頭に「下段ニ出セル用文ノ、章句ト同ジ趣キニシテ、別ナル文態ヲ上段ニ記ス、童幼作文ノ際ニ臨デ、別態變格ノ語ヲ求メンニハ、下文ト上段トヲ照シ合セテ、其欲スル所ノ句ヲ擇ブベシ」とあるように、（巻上）は「聚文接辭」として、先ず「年始状ニ用フル辭」「餘寒存問ニ用フル辞」～「賣物注文之文辭」に至る、時令之部、遊覧、慶賀、慰問、雑事之部の5部に分けた82通の書簡中の語句に対する類語類句を載せ、次いで言語、時節、居所、人倫、身體、飲食、衣服、器財、動物、山物、植物、數量の12門に属する語彙・語句を収載する。

（巻下）は本文の證書類文例、願書類文格、届書類文例の3部に分けた無利息預金之證書、營業願書、旅行届等154例に関連する「證券印紙税則要畧」～「利足制限法（明治10年9月11日新令）」等80例を載せる。目録には「成規會意（左訓：ゴキソクルイコヽロヘカタ）目次」とあり、末に「成規會意目録終」とある。

（B）．半紙本2冊。刊記を除きA本に同じ。刊記：右方に「明治十年十二月六日版權免許／同十三年八月九日再版御届／同十三年九月出版發賣」と年記を出し、界線を置いて左に著者原田と出版人水野の名を出す。両者とも住所がAと変わり、肩書に「東京府平民」を入れる。以下2丁半に亙り50名の書肆を出す。大半はAと同じだが、掲載順や表記に出入り・異同がある。

（C）．中本2冊。表紙、題簽：A本に同じ。

封面：飾り枠付き桃紅色紙。文字配置はAに同じ。色刷り口絵が2丁あり、1オは飼っていた犬の首に書状を入れた竹筒を装着し故郷の父母と遣り取りをしたという、書簡の謂れを説く晋の陸機の小傳と画像があり、1ウ2オは郵便配達人達の出発前の姿を描き「驛逓局管内之圖」として3府41県の所在地を挙げる。また2ウは日章旗を交差させ下に「水野書館／藏版之印」と出す。

序：草書体のA本を楷書体陰刻に直し、源義廉の名の上に「従六位」の官位を付し、末に辱知　大月疇書（印）を加える。

内題：巻上はAに同じ。下は＜書牘確證＞の角書き無く、伊藤桂洲の代わりに四戸蓮洲の名を挙げる。

柱刻：丁付は中央、重線の下に「水野版」と記す。丁数：（上）2＋2＋7＋133、（下）7＋147＋奥3丁半。

匡郭：単辺。頭書は有界10行。

刊記：下巻終丁ウ匡郭内。右方に「明治十年十二月六日版權免許／明治十五年三月八日別製本上届＜定價金壹圓＞」、界線を置いて左に「著者　故人・原田道義／出版人　東京府平民・水野慶治郎（小型朱印：松林堂梓）日本橋區通油町十八番地」と記す。次いで上部に「諸國（囮）發行書林」と篆書体で出し、下部に大坂心齋橋通備後町・小谷卯兵衛～薩州鹿児島・吉田幸兵衛の66名、「東京發行書林」日本橋通一丁目・北畠茂兵衛～仝（横山町）三丁目・高橋松之助までの11名、あわせて77名の書肆を3丁半有界11行に列記する。この部分柱は黒魚尾に続き「帝國文證大全　奥一（～四）水野版」とある。

＊判形が変わり、とくに巻下は書工も代わり鼇頭が有界11行から10行になっているため、大きく異なって見えるが、Aの忠実な翻刻である。巻上の目録のうち、7オ6行目途中の「四人倫門」は改行して7行目の頭にしてあるが、その影響も10行目までと7ウの2行目までで収めてある。10行目「使イ」が7ウ1行目「使ヒ」になったり、7ウ4行目「十（サンモツモン）山物門」の振り仮名がサンブツモンになったりしている程度で、仮名遣い等の異同も殆ど無い。

9）．城　頤拙・＜小學習字＞開化女用文大成

半紙本1冊　　表紙：紺色布目地紙

題簽：子持ち枠付き短冊形白紙。「＜小學習字＞開化女用文大成　城　頤拙著完」。

封面：桃紅色紙、子持ち枠付き。タテ3ツ割。中央に「＜小學習字＞開化女用文大成」と書名を大きく出し、右の欄に「城　頤拙著／月痴迂生校」、左に「＜明治十年／二月新鋟＞青山堂梓」と記す。

題辭：漢文体。丁丑（＝明治10年）之春　敬宇中邨正直。

目録：「＜小學習字＞開化女用文大成」／目次（せうがくしうじ　かいくはじようぶんたいせい　もくじ）」。末に同じく書名があり、「了（をはり）」とする。

内題：「＜小學習字＞開化女用文大成（せうがくしうじ　かいくはじようぶんたいせい）／城　頤拙著」。

柱刻：頭書欄に「女用文大成」、魚尾を置いて下方に丁付。「題辞」は中央、「目次」およびイロハ分けは、該当丁のオモテ側、魚尾下方に表示。

丁付：（題辞には無し）。一～三、一～百六十三。1＋3＋163丁。

尾題：目録、内題と同じ振り仮名付きの書名の末に「をはり（畢）」とあり。

刊記：後ろ見返し匡郭内。右方に「明治九年十二月十七日板權免許／明治十年三月十八日刻成發版」と年記を出し、界線を置いて左に「著述并出板人　静岡縣士族・城　頤拙　池端七軒町二十九番地／發兌書行　東京小石川大門町　青山清吉／仝　神田通新石町　同出店」とある。

頭書：「作文字類（サクブンジルイ）・文ヲツクル（イロハ）ワケノ字引」と題するイロハ引きの類語・類句集。有界9行、カタカナ、楷書、カタカナ語注付。上欄外小枠内に見出し語をカタカナで出し、その下に類語・類句を列挙する。

（イノルイ）伊之類・【イワヒビ】：（シユクジツ）祝日・イワヒビ、（サイジツ）祭日・マツリビ、（コクサイ）國祭・クニノオマツリ～（テンチヤウセツ）天長節・十一月三日、今上ノ御タンゼウ日ノイワヒ、（シンシヨウサイ）新嘗祭・十一月廿三日、ニイナメマツリ、シンゴメノオマツリ～【イワヒノルイ】：（シユクジユ）祝壽・イワヒコトブク～（チンジユ）椿壽・八千年ノヨワヒ、（チンネン）椿年・仝シ、～（ラウケイ）老景・トシガヨル、（カム

テイジヨウ）家務逓譲・カトクユヅリワタス、……【イロ】（シヨクサイ）色彩・サイシキ、イロアヒ～（セイコク）正黒・マツクロ、ジユンコウ（純紅）・マツアカ、【イクサダウグ】（ヘイジウ）兵銃・テツボウ、カタナ～（シヤテキ）射的・マトヲイル～（スノルイ）寸之類・【スコシ】（セウセウ）少々・スクナシ、（サセウ）些少・ゴクスコシ～（モウトウ）毛頭・ケノサキホド、（ガウ）毫・ケホド、ガウリン（毫釐）仝シ、……【スミノナ】（ボク）墨・スミ、（ゲンカウ）玄香・スミノイミヨウ～（シヤウクワ）松花・仝シ、（ボクシヤウ）墨松・仝シ。見出し語の標題は387だが、【トリノナ】68、【カラダノナ】115、【シクワン】（仕官）50、【ヒトガラ】（人柄）72など、多くの項目を抱えるものもあり、実際の項目数は相当多い。

本文：年始慶賀の文～留守中急用の請取73通。他郷の夫に近火を告るふみ（長文）、客来に手傳をたのむ文、縁談の見相に人の娘を招く文、御歌始に人を招く文など、「女用文」らしさを示す書状が目につく。

10）．安倍為任・＜頭書布告字解＞開化用文

中本1冊

表紙：黒色布目地紙に網目模様空押し。題簽：欠。

封面：子持ち枠内。中央を幅広になるように重線でタテに3ツ割り。中央に「＜頭書布告字解＞開化用文全」、右に「安倍為任著　定價十二銭五厘」、左に「東京三書房発兌」とある。

目録：開化用文目録」として「年始之文」～「諸事催促之文」までの16通、「諸證文目次」として「金子借用之証」～「改印届」までの12通を挙げる。

内題：開化用文／東京　安倍為任編輯」、14オに「諸證文目録」。

柱刻：白口。上黒魚尾　目録（他の丁には内容記載無し）丁付。丁付：一～三十。

（目録丁には丁付無し）。存1＋30丁。

刊記：架蔵本は奥付を欠くために不明。吉永氏「往来物解題辞典」によれば明治10年、東京・宇佐美栄太郎板。

頭書：①「＜イロハ分＞布告字解　一名漢語字引」。平仮名訓、楷書体、下

部にカタカナで語註。2字熟語のみ。いノ部：（いつしん）一新　サラリトアラタマル、（いつせん）一洗　同上、（いつはん）一般　イツタイトイフコト、（いつち）一致　ヒトツニナツテサタマルコト～すノ部：（すんち）寸地　スコシノヂメン、（すいび）衰微　オトロヘル、（ずいじう）随従　ツキシタガフ　393語。

少し例を挙げると

（はいたう）廃刀　カタナワキザシヲサスヲヤメル、（いつしう）一週　ヒトマハリ、又七日目ノコト、（ほうくわん）奉還　ロクヲヘンナフス、（くわうこく）皇國　日本ノコト、（でんしん）電信　ハリガネダヨリ、（でんほう）電報　同上

の如くである。

②「開化節用」28ウ2行目～30ウ。（いす）椅子　コシカケノコト、（いぎりす）英吉利　イギリスノコト～（コウトウ）江東　フカヾハノコト、（リウザン）龍山　アサクサノコト　38語。（クン）君　キミトイフ〇タツトミテノコトバ、（セイヨウサン）西洋傘　カウモリガサノコト、（クハリンシヤ）火輪車　ヲカジヤウキノコト、（セツ）拙　セツシヤナゾトヒゲシタコトバ　（トウタイ）東台　ウヘノヽコト、（ベイセイ）瓶井　カメイドノコト等が並ぶ。

本文：開化用文：細身の行草体、平仮名付訓。稀にカタカナ左訓、レ点、一二点。年始之文～諸事を催促する文16通。諸證文目録：金子借用之証～改印届12通。

11）．東條永胤・開化萬民用文章（外）

半紙本1冊　和紙刷り。表紙：縹色無地紙　題簽：子持ち枠付き短冊形白紙。「＜東條永胤著＞開化萬民用文章全」。

封面：黄紙に子持ち枠匡郭。重線でタテに3ツ割。中央欄に「開化萬民用文章全」と書名を出し、右欄上方に「東條永胤著／光風社龜谷閲」、左欄に「明治十年／四月廿三日／版權免許・東京錦森堂蔵板」と記す。

目次：開化萬民用文章總目録」として、「日用往復文部」と「證券部」に分けて標題名と所在丁数を示す。頭書については「頭書書東類語目」として、

〔書柬類語〕、「稱呼類語」「時候」「物數稱謂」「通用漢語」に分け所在丁数を挙げる。

内題：萬民用文／東條永胤著」。

柱刻：開化萬民用文章、魚尾。下方オモテに丁付。丁付：一～九、一～九十二。

丁数：9＋92丁＋奥。

刊記：後ろ見返し匡郭内。右方に「明治十年四月二十三日／版權免許」と年記を出し、左下寄りに「著者　長野縣士族・東條永胤／第五大區三小區御徒町一丁目五番地寄留／出版人　石川治兵衛／第一大區十二小區馬喰町二丁目一番地」とある。

頭書：①書柬雜詞類語（シヨカンザツシルキゴ）：〔（シクカン　ルマヲシ）肅槭奉白〕文ヲシンズル：○（シクカン　ルマヲシ）肅槭奉白・肅ハツヽシム、槭ハ封スルナリ、○（ツヽシンデシウス　センヲ）虔修寸箋～○（ジウソ）柔素・柔ハ卑下シテイフ、○柔（トツ）訥・訥于言ノ意ニテ謙下ノ詞ナリ、○以上皆手紙ナリ～〔諸般雜語（シヨハンザツゴ）〕、〔書柬結語（シヨカンケツゴ）〕（ノゾンデカンニケウチウ）臨緘翹注、○（チヨニコウ）臨楮叩注ス～○（ザンフク）暫復不荘、○（アツ）軋々不（グ）具

＊がちがちの漢語漢文脈。書名に言う「萬民」にとってどれ程の実用性ありや？の感あり。

②稱呼類語（シヨウコルキゴ）：〔呼フ人ヲ〕（タイタイ）台臺～○内子、○内（ジヨ）助・ミナ通ジテ妻ヲイフ。以下〔自呼〕、〔稱人〕、〔自稱〕と並ぶ。

③時候（ジ コウ）

④物數稱謂（ブツスウシヨウキ）：〔（シヨクゼン）食膳〕米一（リフ）粒～水一（テキ）滴、湯一（フツ）沸。以下〔（ハイフク）佩服〕、（キザイ）器財、〔（ドウブツ）動物〕、〔（シヨク）植物〕〔（ギブツガシヨウ）儀物雅称・進物モノヽ異称ナリ：（サイチン）蔡珍、○（サウチヨ）霜楮・通シテ紙ヲイフ～○（バニフ）馬乳・ブダウ、白（クハ）菓・ギンナン。

⑤通用漢語：＊語注のイロハ順。楷書カタカナ。

イ〔以〕（カウタイ）交代・イリカハル、○（キヨキ＜まま＞セツ）曲折・イリワケ、○（リヨウレキ）凌轢・イジメル～ス〔寸〕、（セイケイ）生計＜

註なし＞、○（セイゼツ）精絶・スグルヽ、○（ノウリヤウ）納凉・スヾミ。

＊（クワリウ）花柳・ドラアソビ、（ナニゴト）何事・ドウシタコトデ、(インエン）因縁・チヤラクラデトリイル、（ロウ）弄・チヤニスル、（コソウ）錮送・アミノリモノニノセテヤルなどの語註が目につく。

本文：①行草体。右訓は平かな左訓はカタカナ。但し文例によっては楷書・片仮名交じり文で、その場合は右訓カタカナ。往復書簡のものもあり、新年賀人之文～寄未逢人之文までの21通。②證券之部：願書、届出書を含む46通。

12）．本田利喜・＜新撰＞開化用文

中本1冊　表紙：黒色布目地紙に紗綾形空押し。洋紙刷り。

題簽：子持ち枠付き短冊形白紙。上に「本田利喜編緝」と角書を出し、界線を置いて下方に「＜新撰＞開化用文　全」と記す。

＊袋：白紙に常盤色の面をつくり、タテに3ツ割。白ヌキで中央に「＜新撰＞開化用文　全」、右に「本田利喜編輯」、左に「東京　荒川書屋」と記す。

封面：子持ち枠付匡郭内を、中央が幅広になるようにタテに3ツ割。中央に＜本田利喜編輯＞」の角書きの下に界線を置き、その下方に白ヌキ字で「＜新撰＞開化用文全」と書名、右に「漢語節用諸證文例」、左欄に「東京書林　奎運堂發「印・大賣」と発行元を記す。

目次：開化用文目次、諸証文目次（以上有界3段、以下2段）、頭書漢語伊呂波節用目次、頭書諸願届文例目次の4部門に分け示す。

内題：＜新撰＞開化用文／本田利喜編」。

柱刻：白口、「目次」。目次を除く本文部分は下方に丁付のみ存。丁付：一～廿五。

丁数：1＋25＋奥。

刊記：後ろ見返し匡郭内。右方に「明治十一年第四月十九日出版御届／仝年第五月初一日刻成販行」と年記を出し、界線を置いて左に、「編輯兼出版人　東京五之七下谷同朋町五番地・＜平民＞本田利喜／賣捌人　仝壹之拾貳・馬喰町二丁目九番地・＜平民＞荒川藤兵衛」と記す。

尾題：終丁ウ本文末に「「新撰開化用文大尾」とある。
頭書：①. 漢語節用（カンゴセツヨウ）。楷書、両点・片仮名、イロハ順。有界10行2段。イロハ分け門標は五体伊呂波様式。
い・（イツパン）一般、（イツトウ）－等、（イヤク）違約、（イハイ）－背～
す・（スイジヤク）－弱、（スンゲキ）寸隙、（スウフ）趨赴、（スイフ）水夫。15ウまで。490項。維新、因循、奉還、知事、良民、和親、開化、瓦斯、輿地、大政、列車、練兵、布告、駅逓、英断、教育、旧弊、政府などの語が載る。
②16オ～終丁（25ウ）諸願届文例。送籍願～病死届（目：死去届）28通。見世物興行願、銃猟職業免許願（目：猟銃免許願）、人力車検印願、人力車譲替届、人力車廃業届、諸渡世願、諸渡世廃業願、諸藝人鑑札願など、当時の世情を伺う参考となる文例が載る。
本文：行草体（標題は楷書体）。（1）1. 年始の文、2. 右返事の文（目：右の返事）、3. 寒中見舞の文～ 24、添書して人を遣す文、25. 大水見舞の文、26.開店を賀する文。26通15ウまで。
（2）諸証文（目）：逓送券（目：送り状）～委任状之事（目：委任状）11通。

13）. 楢崎隆存・書式類聚便覧
中本1冊　　表紙：黒布目地紙に紗綾形模様空押し。
題簽：子持ち枠付き短冊形白紙。「＜新増日用＞書式類聚便覧　全」。書名右脇に「楢崎隆存著」とあり。
目次：書式類聚便覧目次」。本文の方は末に「已上終」とアリ。〇で数字を囲み1. 婚姻届書～ 50. 女房持参金手形までの標題名のみを挙げる。頭書の方は「伊呂波引目録」とアリ、所在丁数を示す。ゐは「い部」、江は「ゑ部」とアリ。
内題：書式類聚便覧」。
柱刻：「類聚便覧　黒魚尾　〇（丁付）」。丁付：一、二、初、二～五十一。
丁数：2＋51＋奥。
刊記：後ろ見返し匡郭内。右方に「明治十二年一月十五日出版御届／同年一

月出版」と年記を出し、界線を置いて左に、「著述　大阪府平民・楢崎隆存　第六大區三小区區上福島村八百廿番地／出版人　同・岡田藤三郎　第一大區八小區本町四丁目十九番地／同・濱本伊三郎　第三大區一小區京町堀通二丁目廿七番地／同・中野啓藏　第一大區二小區内本町一番地」と記す。

尾題：頭書：＜日々必用＞數引節用尾、本文：書式類聚便覧終」。

頭書：＜日々必用＞數引節用」、有界10行5字詰。早引両点形式、楷書体、左訓はカタカナ。い一・（い）意.（同）以.（同）伊.（同）易.〜す五・（すいりやう）推量.（すゝみでる）進出.（すいしやう）水晶.（すきとほる）玲瓏. 3,103項目。

＊イロハ分け門標：「ね二」ナシ。項目は8項アリ。ゐ、おは項目ともにナシ。江は「おくのゑにあり」とする。い・ゐ、お・をは混在している。

＊語注は、い四・一首（詩歌）、ろ三・ろくふ（六腑）（人の）、ろ四・（六）しん（親）（父母、兄弟、妻子）、は一・派（宗旨）、を一・緒（糸の）、苧（麻の）のみ。

＊掲出順は、概ね前方に言語、器財、人物、末に草木、動物、鳥、魚貝類となっている。

＊（ばつふ）幕府、（うたわし）禮美、（けんぴ）兼備、（ふりよけん）不了簡、（ころ）衣、（ころじつ）頃日など誤刻がある。また、（いんじゆん）因循、（いちじせんきん）一字千金、（はんじ）判事、（につくわうさん）日光山、（わうせいふつこ）王政復古、（かいこう）開港、（かねきん）西洋布、（えんぜつ）演説などの語が載るが、この時期のものとしては時代語が少ない。

本文：行草体。文例の標題は矩形枠で囲い、楷書・カタカナで示し、検索しやすくしてある。15に「変死人引取御願」、「諸書式類」のはじめに16「海外旅券願書式」あり。

14）. 寺井與三郎・＜日用便覧＞新選作文自在

小ぶりの半紙本2巻合1冊　表紙：黒布目地紙に飛翔する鶴と雲形紋空押し。題簽：子持ち枠付き短冊形白紙。「＜日用便覧＞新選作文自在　寺井與三郎編輯」。

封面：紅赤色地紙に子持ち枠、重線でタテ3ツ割。中央に角書きと書名、右に「寺井與三郎編輯／小笠原香雨浄書」、左に「明治十二年／七月新刻　松雲堂梓」。

目次：下段に「目次」とあって、「年始之文」～「喪を弔之文」までの54通の書簡例、次いで「頭書目次」として「雅俗簡端」～「時令雑詞」、「用文雑詞いろは部分」までの21項を立て、22以下は「諸證券書式」として「金子借用之證」～「雇人引取證」までの18例を立てる。末に「＜日用便覧＞新選作文自在目次終」、頭書は「諸證券書式了」とある。

内題：＜日用便覧＞新選作文自在巻上（下）／寺井與三郎編」。

尾題：＜日用便覧＞新選作文自在巻上（下）終」。

柱刻：中黒口、黒魚尾。「新選作文自在目録巻之上（巻之下）」。下方に丁付。（目次）一～四、（上）一～四十八、（下）四十四。4＋48＋44丁＋奥。

刊記：後ろ見返し匡郭内。右方に「明治十二年五月廿八日出版御届／同年七月刻成」と年記を出し、左に「編輯者　大阪府平民・寺井與三郎　東區北渡邉町三十番地／出版人　同・鹿田静七　東區安土町四丁目四十八番地」と記す。

頭書：有界10行。1.雅俗簡端～ 7.我稱居處と来て、イキナリ㋭益弥之辨～㋣我称安全となり、次に11.返翰端書と番号順に戻り、19.十二月之異名、20.時令雑詞と続く。21「用文雑詞」は、イロハ分け、カタカナ・楷書。（イ）（イハヒ）祝、（イハフ）賀、（イトフ）厭～（イトマコヒ）暇乞、（イヒフクメ）言含、（イマイマシク）忌々敷～（ス）（スク）好、（スヰサツ）推察、（スコシ）少～（ステニ）既、（スエ）末、（スマイ）住居。977項目。22オ3行目以下は「諸證券書式」金子借用之證となり、雇人引取證で終る。

＊イロハ分けの「用文雑詞」は無註で項目数も少ないが、例えば20「時令雑詞」を見ると、先年：マヘカタノトシ、前年：同上、昨年：キヨネン、旧年：同上、（カクサイ）客歳：同上、（シヤウネン）宵年：同上、去年：同上、昨日：キノフ、（イジツ）異日：同上、（サクウ）昨烏：同上、（ゼンウ）前烏：同上、明後日：アサツテ、（メウグワイジツ）明外日:同上、（グワイゴジツ）外後日：同上、（ダイゴジツ）大後日：同上、（ラウグワイゴジツ）

老外後日：同上などとあって、頭書にある語彙と、草書体の各本文の後に楷書カタカナ訓註付きで「類語」として挙げられているものを併せれば、ある程度の語彙数は確保されており、「自在」を謳う書名から外れるものではない。

＊本文中には9「花見誘引之文」、11「近傍遊行誘之文」のような通例に混じって、35「議長拝命を賀す文」36「同回示」が見える。

15）．太田聿郎・大全作文自在

半紙本2巻2冊

表紙：黒布目地紙。

題簽：子持ち枠付短冊形白紙。「大全作文自在　太田聿郎著述　乾（坤）」。

（A）．封面：金銀砂子散らし桃色紙に飾り枠。上欄外に「日用寶鑒」と右横書き。内部をタテに3ツ割。中央に書名、右に太田聿良著述／名和對月書＜翻刻不許＞、左に＜版權免許＞柳前華書樓」と出す。「柳前華」とは、奥付けにある柳原・前川・花井の大阪3書肆の頭字を採ったもの。

題辞：1オは浅蘇芳色の竹葉の飾り枠内に飛翔する数羽の雀と「明雲」の題辞（春颯居士、1ウ・2オは陰刻で漢文体の題言（竹涯中尾誼明識）、2ウは黒枠に柘榴の図（林美蹊書・畫）。

凡例：明治十二年七月　編者識。

目録：「大全作文自在目録」、「鼇頭目録」として乾冊に下之巻の分も掲載。

柱刻：始め2丁と奥付には記載ナシ。（乾）本文は黒魚尾の下に凡例、目録、大全作文自在巻之上（丁付七十六からは巻上）、（坤）始め3丁が大全作文自在巻下、以下巻之下、丁付。鼇頭はオモテ側に「〇簡端」「〇返簡冒頭」「〇安否」あるいは34オ「〇綴字イ」、35オ～「〇イ」、「〇ロ」等と内容を示す標目、坤冊始め3丁は記載無く、次丁から〇ナシで「ト」～「ス」。

丁付：（乾）始め3丁にはナシ。目録丁から一～十、本文から一～百五十一、（坤）一～三、三後、四～百五十。丁数：（乾）3＋10＋151、（坤）151。

内題：大全作文自在巻之上（巻下）／太田聿郎著／名和對月書」。尾題：大全作文自在巻之上（巻之下）終」。

刊記：坤冊末2丁に「發賣書舗」として、大阪・大野木市兵衛、同・松村九兵衛～上田文齊、山本政次郎までの37軒の書肆名を列記し、後ろ見返し匡郭内右方に「明治十二年八月廿六日版權免許／同年十月刻成＜定價金壹圓＞」と出し、界線を置いて左に、「著述者　大阪府平民　太田聿郎・大阪府北區堂島舩大工町第廿番地寄留／出版者　同　柳原喜兵衛・同東區北久太郎町四丁目第十四番地住／同　同　花井知久・同東區安土町四丁目第十一番地住／同　同　前川善兵衛・同東區南久寶寺町四丁目第三十五番地住」と記す。

頭書：有界9行、カタカナ・楷書。（上）簡端、返簡冒頭、安否、文末、傍書、同返翰、追啓、居處、人倫（他ノ父ノ稱～他人ノ稱）、品物名數（文具類～鳥獸類）、時候、日時、34オ5行目～（セ＜まま＞ツジ）綴字：㋑意（意底、趣旨～貴意、任尊意）、無異儀、（ヲンイデ）御出、痛入～（ユ＜まま＞ウメン）宥免、家、偽、一、㋺爐、論、露顕、……151オ7行目㋟何角、（ナシ）無・～（ナクコレソロ）無之候、（ナクタジ）無他事。（下）（ナク）無・（ナクオボツカ）無覺束、無心元～無餘儀、無差障、（ナル）成・被成下忝奉存候～成程、……㋩（ズイ）瑞、（スミヤカ）速。末に「作文綴字終」とアリ。

本文：（上）歳首之慶辭、右ニ復する啓～開廛報告之文、同返章68通。草書体5行、平仮名振りかな、左訓カタカナ。各書簡の末にカタカナ・楷書体で「類語」を挙げ語注を付す。したがって収載語彙数はかなり多くなる。（下）送友人行米国文、同返書～書籍を注文する手簡、同答書、馳走になりし礼状30通。以下3部に分けて掲出。證券文例：金子借用之證～配分金受取之證23通。届書之部：旅行届～家督相續御届30通。願書之部：何商開業御願～＜私家＞塾開業御願49通。

＊本文末終丁ウに「御祭日及御祝日畧解」を載せ、末に「此く載する日は、いつれも正しき御祭祝日なれば、國旗を掲げて祝し奉るべし」とする。

＊書簡中には、箕面山の觀楓を約する文、在東京之友人より新海苔を贈るニ謝する文の他、下巻には、送友人行米国文、熱海温泉ニ入浴するを勧むる文、造幣局拝見を誘ふ文、國立銀行設立を談ずる文、新聞演説會傍聴を約する文、幼稚園入学を勧る文、願書に雛型入りでフラフ設置御願、電信技術生入寮願、硝子燈設置御願、娼妓稼御鑑札御願等があって目を惹く。

(B). 封面：砂子散らし無しの桃色紙。
題辞、凡例の後に大坂・響泉堂刻の洋紙銅版細刻「東京以西（以北）電信賃錢表」「北陸道線電信賃錢表」を2丁挿入する。Aにあった題辞、題言、奥付前の發賣書舗2丁分はナシ。
＊A本より刷りが良い個所もあり、本書の方が若刷りかもしれないが、取敢えずこの順にしておく。

16. 井汲養造・帝國萬民用文
半紙本2巻2冊
（＊本書は15太田聿郎「大全作文自在」の改題・改竄本である＜以下太田と略称する＞。そのため書型の記述が煩雑になることをお断りしておく）。
表紙：藍色布目地紙に紗綾形模様空押し。題簽：子持ち枠付き短冊形白紙。「帝國萬民用文＜井汲養造著述／名和菱江揮毫＞　乾（坤）」。封面：紅梅色地紙に子持ち枠と花の絵。巻紙の中に「帝國萬民用文」と篆書体で書名を出し「雙木散人篆（印）」と記す。次いで題辞、さらに灰色の電信柱の間に、巻紙の用箋を置き、草書体・書簡形式の序文（明治廿二年春三月、積善館宛）、下方下地を極薄い淡萌黄に彩る。
＊前付：細字銅版3段仕立て洋紙17丁を新たに付加し多くの日用百科情報を載せる。近世後期の大型節用集の前付を思わせるものがある。上段は專賣特許條例、地所區別、地租、地方税～大日本國郡名并府縣管轄名邑地、三府緯経時刻遅速、三府名勝地概記の18、中段は證券印税規則、登記法、出訴期限規則に始まり世界國名概表、色紙短冊ノ書式、俳諧發句題季寄早見、茶湯之獨學、図入りの茶具之名目など27種、下段は爲換手形約束手形條例、郵便條例摘要、日本國立銀行表、洋筭數字、英字以呂波、苗字、男女通称文字、生花獨稽古（図入り）、潮汐満干表、二十四節舊新比較等23、合計68種類の情報を載せる。7丁目までは柱のオモテ側に、内容の標目を記す。
柱刻：イロハ、簡端等の標目（7オまで）、巻分け、丁付のみ残し、太田にあった書名は削る。丁付：（上）はじめ2丁は無く、前付けが一～十七、目録が一～三、本文が一～百五十一。（下）一～七十二、新刻の銅版：七十三～

七十九終。丁数：（上）2＋3＋151、（下）79＋奥付。
内題：帝國萬民用文巻上（巻下）／井汲養造著述／名和菱江揮毫」。「菱江」は即ち對月のことか。
尾題：帝國萬民用文巻上（巻下）終」。巻下は太田の72ウ最終行に入れる。
「類語」：昨夜～對面の10行のうち、最終行の昇堂、對面の2語を削り、スペースを作って尾題を入れている。ここに持って来たのは、次丁から始る太田「證券文例」以下「届書之部」、「願書之部」をすべて削ったためである。
頭書「綴字」は同じく72ウ「（コノカタ）以來」で止め、「エ奥ノエノ部ニ入ル」「テ（テン）天」以下は新刻・細字銅版有界16行（丁付：七十三～七十九）に移行。尾題を「作文類語いろは引終」とする。
凡例：無し。
目録：太田のそれを流用。太田の標題「大全作文自在」の部分を削り「帝國萬民用文」と入木。3ウ2行目までで止め、「證券文例」以下すべてを削る。
刊記：後ろ見返し匡郭内。右方に積善館の出版物にしばしば見られるパターン：右に「積善館發行」左上に「版權所有」の文字を陰刻にし、右方に「明治二十二年十月十日印刷落成／同二十二年十二月廿日出版御届」と年記を出し、次いで左に「著述者　福井縣士族　井汲養造・大阪市東區安土町四丁目十一番地寄留／發行者　大阪府平民　石田忠兵衛・大阪市東區道修町一丁目七番地／印行者　大阪府平民　阪田吉太郎・大阪市西區新町一丁目三十二番地」と記す。
また、その前、終丁ウに、上に「大阪積善舘發行作文書類畧目」として、「福井淳先生著述＜鼇頭作文類語＞中等作文五百題　全二冊」～「香川一秀先生著述＜淑女必携＞新撰女子用文操鏡　全二冊」の、本書を含む17点の広告が上下2段に載る。
＊相当な改竄ぶりである。(註4)

17）．本多芳雄・＜明治新刻＞農業往来
中本1冊　表紙：黒紫色地紙に網目模様空押し
題簽：子持ち枠付き短冊形白紙。「＜明治新刻＞農業往来　本多芳雄編全」。

封面：匡郭内、上部に「農業往来」の書名を右横書きに大きく出し、その左右に「明治」「新刻」と記す。その下方に「〇（タスウメイモク）田数名目、（カテノメウモク）粮之名目、〇（キンセンノメウモク）金錢之名目、〇（セフスウノメウモク）少数之名目、〇大數之名目を有界10行に出し、末に「（イジヤウ）以上」とある。

内題：頭書は「農家字引（ノウカジビキ）」、本文は「＜明治新刻＞農業往来（のうぎやうわうらい）」。

柱刻：白口、下部に「ノ」と出しその下に丁付。丁付：一～十八了。18＋奥。

尾題：頭書は「農家字引止（ノウカジヒキ）」、本文は「＜明治新刻＞農業往来畢（のうぎやうわうらいをはり）」とある。

刊記：後ろ見返し匡郭内。右方に「明治十二年十一月一日出版御届」、界線を置いて左に「編輯人　東京府平民・本多芳雄　東京下谷區下谷仝胞町三番地／出版人　東京府平民・荒川藤兵衛（朱印・錦森堂印）、仝日本橋區馬喰町二丁目九番地」とある。

＊頭書：「農家字引」はイロハ分け、カタカナ・楷書体。語註もカタカナ表記だが、ごく少ない。伊部：（井）莞・タヽミニスルモノ、（井）藺・仝シ、（イネ）稲～須部：（スイクワ）西瓜、（スモヽ）李、（スド）簀戸。451項目。末に「必要ノ文字ト云ヘドモ、本文ニアル字ハ、多クコヽニ略ス、看ル人勿異」との言い訳がある。（ホゾロヒ）穂揃、（ホダシ）穂出、（ホウネンノミツギモノ）豊年之貢物・雪ノコト、（ワルツチ）悪土、（カキバイ）蛎灰、（ネバツチ）埴土、（ノラ）耕地、（ヤトヒヲトコヲンナ）雇男女、（マンサク）満作、（ゲシ）夏至・<u>五月ノ中ナリ</u>、（コヘタメ）糞溜、（テンキヨシワロシ）天氣能悪、（サクヲトコ）作男、（シンマイ）新米・（コマイ）古米、（ヒゞアカゞリ）胼皹、（スリヌカ）稃など農業往来ならではの項目が並んでいる。

18）．塚田為徳・＜改正開化＞日要用文章

中本1冊　表紙：黄色地紙に紗綾形模様空押し。洋紙刷り。

題簽：子持ち枠付き短冊形白紙。「塚田為徳編輯＜改正開化＞日要用文章＜東京區分町鑑・府縣一覧表＞全」。

封面：子持太枠内を中央が幅広になるようにタテに3ツ割。中央の欄に大きく「＜改正開化＞日要用文章」と書名を出し、右脇に「漢語節用」、左脇に「諸證文例願届書式」と内容を表示する。そして界線を置いて右に「塚田為徳編輯＜東京區分町鑑／府縣弍覽表＞附」、左に「東京　清寳堂」と出す。

＊巻頭に「改正東京區分町鑑」（銅版色刷り）と銅版の「改正府縣一覧表」を折込みで付す。この点からしても、本書が先行する稲葉永孝の「両點早字引」を模倣していることが窺える。

柱刻：白口、下方に丁付のみ。丁付：一～廿八、28丁＋奥。内題：ナシ。

刊記：後ろ見返し匡郭内に右から「明治十三年九月六日御届／編輯人・塚田為徳／日本橋區本銀町／二丁目五番地／出版人・清水嘉兵衛／神田區鍋町／二番地」とあり。

頭書：①標題ナシだが、封面に「漢語節用」とある。有界8行3段、イロハ順、行草体両点形式。左訓はカタカナ。

い：依頼（いらい）、因循（いんじゅん）、郵便（いうびん）、維新（いしん）～す：浣洗（すゝぎあらひ）、些少（すこし）、凉納（すゞみ）。18ウまで。820項目。

②願書之部（18ウ～21ウ）：養子御願～漁船検印御願、6通。

③届之部（21ウ～28ウ）：出産御届～盗賊（とうなん＜ママ＞）御届、末に「諸願届文例畢」とあり。

本文：1. 賀新年を之文、2. 祭日ニ人招く文～36. 出水見舞之文、37. 田畑之賣物を知らする文　37通。18ウまで。

＊35. 新聞紙を送ル文に「先日御約束申候倫頓毎週新聞其他両三種到着仕候間」云々とアリ。こういうところに、利用者をくすぐる企てが隠されていると見てよいであろう。

（19オから）諸証文之部：1. 金子借用之證～10. 雇人受状之事　10通。

19）. 山本幸吉・魁華要文章

中本1冊

表紙：黄色地紙に紗綾形模様空押し。

題簽：子持ち枠付き短冊形白紙。「魁華要文章＜山本幸吉編＞　全」。

封面：子持ち枠内上部に「御届明治十六年第一月四日」と年記を右横書きで

出し、下方を中央の欄が幅広になるようにしてタテに3ツ割。太字で大きく書名を出す。右欄に「山本幸吉編纂／僊洲漁夫孝書」左欄に「東京　静觀堂梓（印)」と記す。

目次：「目次」とのみあり、頭書の「両點早字引」～「世話字類」までの4種と、「本文」として「年始之文」～「悔吊之文」の10通と、「金円借用之文」～「盗難届」「離縁届」それに「刑法治罪法」の計18条を挙げる。

内題：巻頭にはナシ。8オに「證書文例」、19ウに「届類文例」、26オに「刑法國字畧解」とあり内容を示す。

柱刻：白口、下方に丁付。丁付：一～三十九。39＋奥。

尾題：頭書は「世話字類畢」、本文は内容により25オに「願届文例尾」、終丁39ウに「刑法及期限規則畧解畢」とある。

刊記：後ろ見返し匡郭内右方に「明治十六年一月／四日出版御届　編輯人・山本幸吉　神田區江川町九番地／出版人・安田虎男　日本橋區元柳町二番地」と出し、界線を置いて左上部に「發兌書林」と右横書きに出し、下方に「日本橋通一丁目・須原屋茂兵衛、芝三島町・和泉屋市兵衛、日本橋通二丁目・山城屋佐兵衛、横山町一丁目・出雲寺萬次郎、通三丁目・丸屋善七、銀座三丁目・和泉屋北郎、浅草芽町・須原屋伊八」と7名の書肆を住所付で列記する。

頭書：①表題ナシ。目次に「両點早字引」とある。イロハ順、楷書体、平仮名・両点形式。有界、8行3段。い部：有名・なだかい、有功・てがら、遊興・あそぶ、郵便・ふみのたより～す部：水勢・みつのいきほひ、水練・およきのけいこ、推挙、推壓・おさへつける。1ウ～27ウ、1181項目。

②西洋普通文字：筒袴、筒上衣～否、然、氷。58項目。末に「普通字尾」とあり。註は、玻璃燈又石油燈トモカク、洋権妻・日本人のいふ処、洋人下等社會に至りては、寒夜を凌ぐ為、ラシャメンと云ふ獣を抱いて臥すと、故に我國の女にして洋人の妾となる者をさして云ふ弊言なりとか。の2項目のみ。29ウまで。

③萬國名尽：日本・洋人誤認<ママ>して稱する語なり、支那～上海、柬薩加。29。

④世話字類：杲、日負～瘁、虎列刺。400項。

本文：①行草体、平仮名付訓、左訓はカタカナ。7～8行。一二点、レ点あ

り。
②末に細字13行で「刑法國字略解」14丁半あり。
備考：書名の「魁華」は「かいか（←開化）」と読ませるのであろう。

20）．稲葉永孝・＜漢語＞両點早字引＜用文章・東京圖＞
（A）．中本1冊　　表紙：黄色地紙に紗綾形模様空押し。
題簽：子持ち枠付き短冊形白または淡香色紙。「＜漢語＞両點早字引＜用文章・東京圖＞全」。
封面：匡郭内をタテに3ツ割にし、中央に白ヌキで「＜漢語＞両點早字引」と書名を大きく出し、右に「稲葉永孝編纂萬通明治要文章」、左に「改正東京區分圖・印（福宮藏書）」と記す。
＊巻頭に銅版色刷りの「改正東京區分御繪圖」「改正東京區分町鑑」2葉を折込む。
目録：＜漢語＞両點早字引附用文章目次」。
内題、尾題ナシ。
柱刻：白口、下方に丁付のみアリ。丁付：一～廿二。22丁＋奥。
刊記：後ろ見返し匡郭内右方上部に、「出版御届　明治十／三年二月九日／仝月十日出版」と年記を出し、その下に編輯人　稲葉永孝・本所區緑町四丁目四十四番地、出版人　福宮源次郎・日本橋區蛎売町三丁目十三番地の2名を出す。そして界線を置いて左に、發兌書林として須原屋茂兵衛、山城屋佐兵衛、和泉屋市兵衛、出雲寺萬次郎、山本幸吉の5名を住所付で出す。
（年記の個所はやや不揃いな感じがするが、明治のこの期の出版物は、届け出時日の厳守を勘えてかぎりぎりまで調整することがあり（手で書き入れたり訂正しているケースもある）、細工をしたわけでは無い）。
本文：上下2段。洋紙、鉛版。
頭書：有界7行3段イロハ分け、両点形式。僕（ぼく）、粗（ほゞ）、君（きみ）、頗（すこぶる）、即（すなわち）の6項を除くと、他はすべて2字熟語。（委任、違約、違勅～推究、随従、出納）（20ウまで）の計775項と、出産届～妻離縁届の6通の届書。

下段は、年始之文～悔吊（くやみとふらふ）の文までの11通と、明治6年5月31日第184号御布告、同11月5日第362号御布告、5年10月2日第295号御布告をはさんで、金圓借用證～雇人請状、委任状、離縁状までの10通の「證書文例」を載せる。

(B)．書型・内容とも20Aに同じ。刊記の年記の「仝月十日出版」の部分が無い。

21)．稲葉永孝・＜改正＞両點早字引＜用文章・官員表＞

中本1冊　　表紙：黄色地紙に紗綾形模様空押し。

題簽：子持ち枠付き短冊形白紙。「＜改正＞両點早字引＜用文章・官員表＞全」。

封面：飾り枠内をタテに3ツ割にし、中央に大きく「＜改正増補＞両點早字引」と白ヌキで書名を大きく出し、右に「明治用文章」、左に「勅奏官員表」と記す。

＊巻頭に銅版両面刷りの「勅奏官員表」1葉を折り込む。末に「明治十三年十月六日御届　＜編輯兼出版人＞芝區新堀町十七番地・矢＜ママ＞島徳太郎」とアリ。

目録：目次」とのみある。

内題ナシ。尾題：明治要文章畢」。

柱刻：白口、下方に丁付のみある。丁付：一～廿二。22丁＋奥付。

刊記：様式は20Aと同じ。すなわち後ろ見返し匡郭内右方上部に、「明治十三年十月六日出版御届」と年記を記し、その下に編輯人・稲葉永孝／出版人・失島徳太郎の名を東京の居住所付きで挙げる。そして界線を置いて左に「發兌書林」として、須原屋茂兵衛・山城屋佐兵衛・和泉屋市兵衛・出雲寺萬次郎・相模屋知三郎の5名を東京の住所付きで列記する。相模屋をのぞく4名は掲出順とも20Aに同じ。

頭書：有界7行3段イロハ分け両点形式の字類のみ。い・いうめい（有名）、いうこう（有功）、いうほ（遊歩）、いうきやう（遊興）、いうびん（郵便）、いらい（以来）～す・ずゐじう（随従）、すうよう（枢要）、すゐたう（出

納)、すうがく（數學)、すうこ（數個)、すうくわい（數回）までの857項を搭載する。

20A、Bの見出し字が行草体であるのに対し、本書は楷書体である。

＊20Aと本書の項目の違いを若干記すと、まず、冒頭の「いうめい」「いうほ」「いうきやう」の3項と、「いうきよ（幽居)」「いうしう（幽囚)」の2項計5項は、20Aでは「ゆうめい」「ゆうほ」「ゆうきやう」「ゆうきよ」「ゆうしう」と「ゆ」に配属されている。一字項では「ぼく（僕)」を除く4項が無く、終りの「す」では、「すこぶる（頗)」「すなわち（即)」が無く、「すんし（寸志)」「すゐみん（睡眠)」「すゐりやう（推量)」「すゐくわ（酔臥)」「すゐぐわん（酔眼)」が入るということで、20Aの14項に対し3項増えて17項となっている。「ぼく（僕)」を含む「ほ」では、総数の20は同じであるが、20Aの「ほうきう（俸給)」「ぼうげん（暴言)」「ぼうろん（暴論)」「ぼうがい（妨害)」「ぼうきよ（暴挙)」「ほゞ(粗)」に対し、「ほんぽう（本邦)」「ほうねん（豊年)」「ほういう（朋友)」「ぼこう（母公)」「ぼんぶ（凡夫)」「ぼうぜん（忙然)」の6項が入っている。

続く「へ」は、掲出順は異なるが20項で全く同じ。「ぬ」は20Aの11項目に対し、「ぬひ（奴婢)」の独自項目があるものの2項と圧倒的に少ない。他にも異同は随所に見られるが、掲出順を故意に変更していると思われる例も多々あり、20Aを基にしていることは間違いない。

＊なお、20Aでは目次に「＜漢語＞両點早字引附用文章」とあって、用文章のほうが従のように記されているが、本来ならばこちらが主体たるべき本文部分で下段にある。これも20Aに倣い綴られており、一部の辞句を変更したりして、同数27の例文が掲載されている。大きな違いは、20Aは例文表題に番号が付されていないが、本書では〇で囲んだ番号が振ってあり、中間の「出訴期限及ヒ規則」に引かれていた明治6年5月、11月の御布告が、本書「奉公人規則印形ノ件出訴期限」では削られていること、5「出産報知之文」が本書では「金子借用之文」となっていること、末の「出産届」以下「遺失届」までの6例が、20Aでは頭書に掲載されていること等を挙げることができる。

また、例文の文辞も、11「悔吊（くやみとふらふ）の文」で、20Aにあった「併ながら死生有命之定理は、固より所不逃（のがれざるところ）ニ候得者、向後御営之儀御孝養之第一ト被存候」の部分が本書には無いという大きな異同のほか、桜花半開之由→桜花爛熳之趣（花見誘引の文）、僕方ニて→我等方ニて、返却遅延→返済遅滞（田畑小作證書）、学倣→習熟（年季受之證）、僕貴君へ→我等貴殿へ（謝罪證書）など、辞句の変更が諸所に見られる。

なお、10「死去為知の文」は双方殆ど同文である。また、「偖此團扇者、友人某氏が多年製造ニ苦心、西洋形に效ひ模造致し候品にて、就中是ハ上等ト申送越候間、不取敢拝呈仕候」を「偖此一瓶者、横濱在住之友人より被贈候最上之フランデン故、暑中悪疫之豫防ニもと存候間、分呈いたし候」（「暑中見舞之文」）に替えるなど、気取った雰囲気を出そうとしている例もある。

22）．稲葉永孝・＜新撰＞開化要文

中本1冊

題簽：子持ち枠付き枯柴色短冊形紙 「＜新撰＞開化要文＜稲葉／永孝／編輯＞全」

扉：飾り枠付き、中央に書名を大きく出し、右に編輯者名、左に「東京書肆紅木堂（印記・出版）」と出す。次丁序文ウには「普通西洋品字」としてパン麵包～ハウス洋屋までの35語を有界7行5段に示す。

刊記：終丁ウ左下方に匡郭を利用して小枠を造り、上方に「明治十四季八月十日御届」と小さく出し、界線を置いて下に編輯人稲葉永孝と出版人小森宗次郎の名を住所付きで4行に記す。この様式は同じ小森版の一連の鶴田真容著作に似る。1＋22丁。

洋紙2段組。上段は「鼇頭」として「出訴期限規則」「受證人規則畧」「願届文例」を出し、末2丁には「以呂波分字類」として、委任、違約、違式、郵便、因循、依頼～も・問罪、せ・政府までの2字熟語（「僕」のみ1字）を、行草体、ひら仮名両点・有界9行4段で記す。97語。この部分は刷り悪し。（いしき）違式・おきてにそむく、（ばいいん）賣淫・ぢごく等の項目を含

む。下段は年始之文～歳暮之文までの16通。

なお、稲葉には他に「普通三體字引」と題し、見出し字を真行草の三体、有界5行6段に収め、音訓をカタカナで示す東京・尾嵜氏蔵版の中本や、明治14年2月6日出版御届・失島版の「＜改正＞規則文例」（洋紙刷。刑法第425～ 430条までを細刻・銅版にした1丁が「刑法総則」の末に入る）、巻頭に色刷りの「大日本帝國全圖」と「違式詿違條例」の折込みが入る「開化重寶記」（明治13年3月16日出版御届・失島版）等がある。

23）．川田剛吉・＜漢語字類＞開化用文證　M18.1求版本

中本1冊　洋紙刷り入紙本。表紙：濃紺色布目地紙。題簽：欠。

封面：薄緑青色紙（白紙もアリ）。子持ち枠内を重線でタテに3つ割りにし、中央に「＜漢語字類＞開化用文證」と書名を出し、右に「川田剛吉著　版権免許」、左に「東京書肆　金鱗堂藏版」と記す。

題辞：明治庚辰（＝13年）春　朝香題。

柱刻：上黒魚尾　＜漢語（＊第3丁目のみ「漢證」と誤刻）字類＞開化用文證　（丁付）」。頭書欄オにカタカナでイロハ分け指標を記す。丁付：一～四、一～六十。4＋60丁＋奥。

目次：「標目」、「諸願届類」、「證書文例」として標題と始まりの丁数を、有界8行2段に出す。末に「目録終」とあり。

内題：頭書欄は「漢語字類」、下段本文部分には「＜漢語字類＞開化用文證／東京　川田剛吉著」とある。尾題は両者とも題名の末に「畢」が付く。

刊記：後ろ見返し淡黄色地紙匡郭内右方に「明治十三年四月十日版權免許／同十八年一月二十七日求版」と年記を出し、界線を置いて左に「著者　東京府平民・川田剛吉・淺草區淺草瓦町二十番地／出版人　東京府士族・伊東武左衛門・芝區櫻田本郷町三番地／發兌者　東京府平民・吉埜喜之助・芝區新田町十九番地」と記す。

頭書：漢語字類」。頭字2字熟字、イロハ順、有界10行2段、楷書。門標・訓および項目下方にある語注ともカタカナ表記。

イノ部：（インエン）因縁・ユカリ、（イシヤウ）委詳・クワシクツマビラ

カ、（イセキ）委積・ツミヲク～スノ部：（スイジ）遂事・スンダコト、（スイキヨ）吹嘘・アヒタフケル（まま）、（スイシ）遂志・ヲモイヲトゲル。2,309項。

ヰ、オ、ヱは門標無し。「イ」にはイ・ヰが混在する。

項目を少し挙げると、維新、（イウデン）郵傳・イウビン（＊＜デンイウ＞傳郵・シユクツギあり）、（イウグン）遊軍・アソビイクサ、（ヘンシフ）編輯・ホンヲコシラヘル、（エンケン）遠賢・カシコキヲトホザク、（シロン）私論・ワタクシアラソヒ、攘夷、（ジユンボウ）遵奉・シタガヒタテマツル、（ジンメイ）尋盟・チカヒヲシナホス等があり、因循に（イントン）とあるは間違い、アウサツ（鏖殺）には語注が無い。

本文：草書体7行。右訓は草仮名、左訓はカタカナ。新年之文～物品注文之文までの42通。

〇諸願届類：営業願（目・営業願書式）～盗難届書式までの14通。徴兵免役願書式アリ。

〇證書文例：金圓借用之文（目・金圓借用證式）～耕地下作證式までの8通。

24）．原田機一編、書・日本文章大成

半紙本　2巻2冊　黒布目地紙に木の葉散らし模様空押し。

題簽：子持ち枠付き短冊形白紙。「日本文章大成　原田機一編　上（下）」。

封面：桃紅色紙に子持ち枠。中央欄を大きくなるようにしてタテに3ツ割。中央に大きく書名、右に「原田機一編并書」、左欄に「東京　山中氏蔵版」とあり。

題字：長三洲。淡香色地紙に唐草模様（魚素鳥跡）。

自序：漢文体、明治十四年歳次辛巳七月　鼎山原田機一識。

目録：日本文章大成總目録」。上巻：年賀之文～諫放蕩生文　返答書を含め72通、下巻：祝會社設立文～壽筵招人文、同復書11通。確證文例：1．諸届類、2．諸願類、3．證文類、4．請書請取類、5．訴答文例。末に「通計一百八十二章」、また、「日本文章大成總目録畢」とある。

2に材木渡世開業願、他国出稼願、相撲興行願、茶屋・貸座敷・待合茶屋・

楊弓店営業願などといった興味深い24例を含む。
内題：日本文章大成上（下）／東京　原田機一編書」。
柱刻：＜鼇頭＞日本文章大成、黒魚尾　長三洲公題字（自序、目録、巻上＜下＞）、丁付。奥付にはナシ。丁付：各丁オモテにアリ。（巻上）一、二、一、二、一～六、一～百廿七、（下）一～百廿二。（上）2＋2＋6＋127、（下）122丁。
刊記：下巻後ろ見返し子持ち枠匡郭内。右方に「明治十四年七月七日板權免許／同年八月出版」と年記を出し、界線を置いて左に「編輯人　東京府平民・原田機一　芝區三田二町目二番地／出版人　同・山中市兵衛　同　三島町十番地」と記す。
頭書：①「日用作文字類」。天地門～言語門まで7門に部類分けをし、その中をイロハ順に配列。有界10行、カタカナ・楷書。音読あるいは語註が項目の下方に付く。下86オに「作文字類終」と尾題があり総計：10590項目。
＜天地門＞（インヤウ）陰陽・カゲヒナタ～（スビツ）地爐・チロ1404項目、＜人倫門＞イトケナシ（幼稚）ヨウチ～スアシ（素跣）ソセン1566項目、＜衣食門＞イシヤウ（衣裳）コロモモスソ～同（スヱル）饑クワイ・飯ノ996項目、＜器財門＞イロガミ（牋）セン、詩文・尺牘ナドヲカク料帋ナリ～スキガヘシ（還魂紙）クワンコンシ、スサ（寸莎）カベノ1680項目、＜動物門＞イヘバト（鴿）カフ～ムカデ（蜈蚣）ゴコウ、＊ここまで巻上最終丁127ウ。以下巻下に移り再び＜動物門＞と門標をたて【ウ】の1項目めから始める。
ウグヒス（鶯）アウ～同（スクモムシ）（蠐螬）セイサウ949項目、＜植物門＞イネ（稲）タウ～ズハヘ（氣條）キテウ933項目、＜言語門＞イハフ（祝）シユク～同（スグルヽ）（妙絶）メウゼツ3062項目。巻下86オまで。
＊若干項目を拾うと、＜天地＞では（ニジ）虹コウ。色ノアザヤカナルヲ云、（同）霓ゲイ。色ノドミタル也、（ムマザクリ）蹄涔テイシン。ムマノアシアトノタマリ水也、（テンチヤウセツ）天長節十一月三日、（キゲンセツ）紀元節二月十一日、（シンシヤウサイ）新嘗祭十一月廿三日などが目につく。＜人倫＞は差別語多く、注意が必要である。ハダヘ（肌）キ。皮ヨリ内ノ肉

ヲ云、同（膚）フ。皮ヨリ外ヲ云、オヤヲミマフ（帰省）キセイ、サシデモノ（僭越人）センエツジン、
＜衣食＞ボウトル（酪）ラク、オザシ（鮝）ケウ。竹ヲ以テ魚ヲツラヌキ干タルナリ、メリヤス（田易）デンエキ、同（莫大小）バクダイセウ、センロフ（繊蘿蔔）ダイコンヲホソク切タル也、＜器財＞オホマハシ（洋船）ヤウセン、オボエチヤウ（掌記冊）シヤウキサツ、同（手冊）シユサツ、ゲダイ（外題）本ノ、同（貼籤）テフシン、ゲダイガミ（簽）シン、＜動物＞イナオフセドリ（稲負鳥）タウフテウ。古今集三鳥ノ一ナリ、ウニカウル（一角獣）イツカクジウ。諸説多シ、今之ヲ略ス、シヤウジヤウ（醯鶏）ケイケイ。酒カメノ中ニ生スル小ムシナリ、
＜植物＞オヒシゲル（生茂）セイモ←＊＜言語＞に入れるべきか？　レイシ（荔枝）今世ニ云レイシハ苦瓜ナリ、和産ナシ、＜言語＞タチ井フルマヒ（起居挙止）キキヨキヨシ、ナニヲモツテ（庸詎）ヨウ、ナニゴト（底事）テイジ、ナニヨリ（於何）オカ、ナニカセン（甘従）カンジウ、ナンスレソ（胡為）コ井、ナニトナク（無大小）ムダイセウ、シドロモドロ（取次筋斗）シユシキント、ヒイル（灘）水ノ地ニシミ込ナリ、ヒキヤウ（卑怯）俗ニ比興千万ナド、書ハ誤也、等がある。②印紙貼用略則（インシテウヨウリヤクソク）。③地所（ヂシヨ）＜質入（シチイレ）書入（カキイレ）＞規則要畧（キソクエウリヤク）。④建物賣買（タテモノバイ、、リヤクソク）略則。⑤代理委任状略則。⑥戸籍同戸列次順（コセキドウコレツシノジユン）。末に「鼇頭畢」とあり。

25）．服部為吉・＜鼇頭熟語＞開化文證

袖珍洋紙銅版　2冊

題簽：子持ち枠付き短冊形白紙。「＜鼇頭熟語＞開化文證　服部爲吉箸　上（下）」

封面：空色地紙、飾り枠付き　タテ3ツ割。中央に書名および「全」、左右脇に「附願届」「證書式」、右に「服部爲吉箸」左に「東京書林擴文堂藏版」と出す。

緒言：漢字・カタカナ、二十年第一月下浣　編者識

目録：①用文目録（尾題による）、②願届證文請取書之部（願書式、證書

式)、③鼇頭熟語、④異名分類

内題：＜鼇頭熟語＞開化文證」。鼇頭は「熟語」とのみアリ。

尾題：＜鼇頭熟語＞開化文證終」。

柱刻：上部に黒魚尾、下方オに丁付。丁付：緒言にはナシ。目録：一～四、（上）一～六十七、（下）六十八～百十七。

刊記：下巻終丁ウ。右方に「明治廿一年九月廿日印刷／仝年九月廿六日出版」と年記を出し、界線を置いて左に「＜箸作兼發行者＞徳島縣平民・服部為吉　東京浅草區福井町三丁目十番地寄留／印刷者　東京府士族・若柳銀次郎　東京日本橋區馬喰町四丁目十八番地」と著作者名等を記す。

頭書：（上）「熟語」（イロハ順、楷書体漢字、カタカナ訓ならびに語註付）。イ之部【以來】イライ：以降、以還、以往、已來、既往、爾後、往時、厥後（ソノノチ）、將來、【一覽】イチラン：縱覽、縱視、通覽～テ之部【頂戴】テウダイ：拝収、拝戴、拝受、辱戴、【叮嚀】テイネイ：鄭重、懇重、懇篤、綿密、慇懃、手厚（テアツイ）、（下）【手後】テオクレ：失期、後期、錯節、失度、【手分】テワケ：分配、部署、區分、分遣～ス之部【住家】スミカ：棲居、栖居、寒栖、荒屋＜此他ワノ部私方ノ所見合スベシ＞、【醉狂】スヰキヤウ：酒癖、暴酒、酒狂という具合に104オ1行目まで類語を載せる。「熟語終」。

次いで「異名分類」があり、人倫（ジンロン）：儒者～弟、人事：出生～祭奠、身體：頭面～心、飲食：酒～米、植物：蘭～芭蕉、氣形：鶯～螢を載せ、末に「異稱分類終」と記す。

本文：草書体、付訓は平仮名またはカタカナ。左訓、訓点アリ。（上）新歳ヲ祝スル文、答文～高年ノ人ヲ賀スル文、答文　53通、（下）願書式：縁組送籍願～魚鳥問屋仲買開業願　17通、届書式：止宿人御届～貿易品賣込届　20通、證書式：金子借用證～請取證　30通。

（以上、頭書に語彙集を搭載する書簡作法書を恣意的に取り上げて来たが、この手のものは数多い。次稿でもそれらを紹介し考察を加えて行きたいと考えている。）

註1．宝暦11年正月版の一本に付された広告「寶文堂藏板豫顯目録、大坂心齋橋筋安堂寺町南江入西側本屋秋田屋大野木市兵衛」123点中に、山本序周先生著、全一冊として、「世に書札用文章の書、数多板行あれとも、万事に便利ならず、今文章千余通を撰ひ、文言の下に二行に分ちて替文章をくわへ、㊤㊦の字を附て、尊卑の文法を知らしむ、其外頭書に書札要用の字尽を節用にくわへて、書札の傳授等かずかず出し、重宝の品もらさずのせ、紙員をいとわず大冊とす」と詳しい内容案内を記す。若杉哲男氏に「文林節用筆海往來をめぐって」（山田忠雄編『國語史學の爲に』第一部・往来物　昭和61．5、笠間書院）があり、『往来物解題辞典』（平成13．3、大空社）に小泉吉永氏の解題が載る。

註2．安永8（1779）年9月版「文林節用筆海往来（ぶんりんせつようひつかいわうらい）」は丙子之冬・據梧散人序。半紙本3ツ切横本で、京・秋田屋平左衛門、江戸・須原屋茂兵衛、大坂・大野木市兵衛刊。イロハ順の往復書簡290通のみ。末に「附録日用必備数品」として「四季十二月之異名」「小笠原流折形圖」「和漢歴代捷覧」「十干十二支」他があるが、享保版等にある前付の諸記事や頭書の「節用字づくし」は無い。天明7年3月版の「文林節用筆海大全」の一本の巻末に、「幼學童蒙日用重宝書物目録」と題する大坂心齋橋安堂寺町南へ入西側　書林・秋田屋大野木市兵衛の広告が付いているものがあるが、「大本文林節用を小本懐中本にして、重宝の品数々のす」とあるは、本書を指す。據梧散人は宝暦2年の「＜宝暦新撰＞早引節用集」に序を寄せている人物と同じだが未詳。

註3．度々申し上げるが、小生の調査は殆どが手近なものによるものである。したがって遺漏は当然多い。補訂すべきものとしては、例えば、次のケースがある。平成21・22年度極東証券寄附講座「辞書・事典」：辞書の世界に報告した宝暦13年11月刊「＜増益改正＞字彙節用悉皆蔵」の表紙裏に慎ましく貼りこめられた出版経緯であるが、その後、状態の良いものを見い出たので、訂正再掲することにする。下線を施した部分が訂正個所である。「此字彙節用集ハ、亡父浄因老編集せる所也、然るに存命の中、八十有餘にして筆を取り煩に、老衰心に任せず、今一二におよんで遺言して世を去れり、よつて其欠たるを補ひ、全これを板行す、今年十七回の忌にあたれり、則為追善、牌前に備へ亡霊を慰し、且ハ世上に流布するものなり」。

　また、これも旧稿に属するが、かつて学内誌に発表し後に『近世辞書論攷－早引・往来・會玉篇』（平成11.6第2刷　慶應義塾大学言語文化研究所）に収録した「宝暦新撰、増補改正、早引節用集」にも、身まかる前に増補訂正しておくべきことがある。本来改訂版として別稿を立てるべきであろうが、紙数の関係もあり、ここに記すことにする。詳細を割愛したので、却って煩雑になってしまったが、お許しを賜りたい。

○宝暦新撰版の題簽は、子持ち枠付き香色短冊形紙で「＜宝暦新撰＞早引節用集全」である。

○Ⅰ類本に天明8年初春版、寛政5年初春版を追加する。

○原本未見のため取敢えずⅠ類本（I）として挙げた寛政11年版は、Ⅱ類本に位

置づける。
○Ⅱ類本文化11年版に＜イ＞＜ロ＞の2本があり、文化12年版には少なくとも＜イ＞～＜ホ＞の5本、細かに検討すると7本があること、うち＜ロ＞本の校異に出した「立派」、い六－か六、＜ハ＞本の（そる）剃－剃の例は削除する。
○Ⅱ類本に文政12年版と嘉永4年求版本を付け加える。
●旧稿（L）文化元年版の序の項で「尾題も本文末にあった「終」の一字が無い」としたが、削除し「尾題は無い」とする。以上やや多くて恐縮であるが、順を追って解説を加えることとする。
• 天明8年版は、刊記上部に「天明八戊申年初春吉旦新刻」と出し、書肆は天明元年版と住所も同じ江戸・西村源六、山﨑金兵衛、大坂・村上伊兵衛、柏原屋渋川與左衛門の4名。天明元年版とは異版で、末に大坂・柏原屋与左衛門の「和書藏版目録」（「日本居家秘用」～「四國霊場記」までの49点）2丁が付く。
• 寛政5年版は住居表示に小異があるものの書肆は天明8年版と同じ2都4名で、刊年は「寛政五癸丑年初春吉日」。封面の「丁附合文」の標題下方に「寛政改」とある。巻末付載の柏原屋与左衛門の「和書藏版目録」に収載書目の異なる2本がある。
• 本文の特徴から今回Ⅱ類本に組入れる寛政11年版は、寛政7年版に基づく改刻。刊記は「寛政十一己未年／正月吉旦／書林／江戸通石町三丁目・西村源六／同・山嵜逸平／大坂心齋橋安堂寺町・村上伊兵衛／同順慶町心齋橋東へ入・柏原屋與左衛門」。丁附合文の下は空白。末に柏原屋の「和書藏版目録」が3丁あり、「日本居家秘用」～「播磨名所圖會」までの52（67）（←数え方による差）点を載せる。
• 文化11年版は（イ）（ロ）の2本。（イ）は年記の他は、文化元年版と同じ2都5軒。薄様刷もある。（ロ）は「文化十一年甲戌正月吉日」の年記は同じだが、書肆が江戸の須原屋茂兵衛、大坂の河内屋太助、萬屋安兵衛、柏原屋與左衛門の4名。刷りもやや劣る。
• 文化12年版はやや複雑。旧稿では（イ）～（ハ）の3本に分けたが、少なくとも後2本を追加すべきかと考える。版本の版面は、印刷時の諸条件で同一の板木によるものでも異なった表情を見せることがあり、時に異版に見えたり単なる後刷りに見えたりする。かてて加えてかぶせ彫り・模刻、補刻、異版に見せるための部分的な改刻の問題もある。
　ここで追加の2本というのは、字体や字詰めが（イ）～（ハ）本と異なっているケースである。（ニ）と（ハ）を比べると、例えば9ウ・10オは明らかに字体が異なり、36ウ・37オ、98ウ・99オ等は字詰め・字体とも異なる。（ホ）本は角書きを含む内題の字体からして他本と異なりを見せており、全体的に線が細いといった具合である。さらに見て行くと（ニ）（ホ）本と匡郭のキレや字体に異なりのあるものが2本程見つかる。若刷り後刷りの違いなのかそれとも異版なのか、判定は今後を待ちたい。
• なお、（イ）のやや後刷りの一本に袋が付いているものがある。子持ち枠内をタテに3ツ割。中央に＜文化新撰＞の角書きを丸で囲み、界線を置き下方に「増

補早引節用集　全」、右に麒麟と松樹の図、左に「書舗・稱觥堂／栄正堂／文刻堂仝梓」とある。稱觥堂は柏原渋川清右衛門、文刻堂は西村源六であり奥付けの書肆と一致するが、栄正堂は未詳。

• 文政12年版は5行本。題簽子持ち枠付き「＜改正増補＞早引節用集　全」。刊記は「文政十二己巳年立春吉旦／書林／江戸日本橋通南一丁目・須原屋茂兵衛／大阪心齊橋通唐物町南へ入・河内屋太助／仝南久太良町中橋西エ入・吉納屋善十郎／仝順慶町五丁目・柏原屋與左衛門」。い四・95「（いきざし）心端」は、「ざ」を「ど」に、「端」を「疾」に改刻し「（いきどし）心疾」（←天保7年版・崑崙堂版と同じ）」とする。これはⅠ類本にあった「（いきざし）心端」の重出や、Ⅱ類本寛政11年版以降文化12年版まで続いた「（いきどし）息疾」の重出に気付いての措置であろう。なお、文化6年版のみ「（いきざし）息端」とある。

• 嘉永4年求版本は旧稿で挙げた文久2年版の前身。題簽、内題、奥付等の様式は全て同じで、刊記の年記の3行目が「嘉永四辛亥年二月求版」、書肆名が「東都書林　馬喰町二丁目・金幸堂　菊屋幸三郎藏」とある。

• そして、大胆と言うかあきれと言うべきか、「例言」に「予か家、祖先より累代書籍を上木して世にひさく、中にも此早引となづくるもの、尤童蒙に便なるを以、大に世に行る、然共旧板撰者の誤を傳ふるもの少からず」云々と語り、「旧来の節用口に任せて呼あつむ故に、門部混雑して一々に其本部に帰するに遑あらず」としてらう・ろう、こう・くわう等の弁別に言及し、さらに「数引の例」としてい一：伊・以・威、 い九：一蓮托生を挙げて「＜増補改正＞早引節用集」の検索法をなぞる「＜訂正増益＞早引節用集」、刊記：正徳乙未春原刻／文化巳己（＝文化6年）秋訂正再刻／甲州八代郡九一色郷／朝比奈荻右衛門版／京室町通綾小路上ル處・製本賣鬻　玉屋祐藏」がある。本文は有界5行、い一：伊．意．位．威．膽．猪．亥（左訓に「十二支」とあり）．藺（とうしんぐさ）＜筵草＞～す九：翠帳紅閨、透額冠、興廃．末永廣。巻末付録は「男女名頭字盡」1種のみ。バレナイとでも思っていたものか、一種の海賊版である。本書は版権問題と近世節用集との問題を細かに指摘し『節用集と近世出版』（平成29．2和泉書院）にまとめられた佐藤貴裕氏も勿論見逃さず、朝比奈単独版の存在も指摘しておられる。因みに「いきどし」は「短氣」、「いきざし」は「心端」とあり、「いきどし」あるいは「いきざし」の重出に気が付いてか、他本に「（いきどし）息疾」または「（いきざし）心端」が入る個所：「（いしふし）意旨不慈」と「（いなじみ＜む＞）居馴染」の間に「（いざよふ）徘徊」が入っている。

註4．改竄本「繪本節用集」2006年度藝文学会シンポジウム―古書－その過去・現在・未来―　藝文研究92号　2007年

註5．秀林・津田鎗三編纂の辞書・字典類には以下のようなものがある。山田氏目録（「近代國語辭書の歩み」下・第一・二部附表＜1981年7月＞三省堂）に収載されていないものもあり、その書型をやや詳しく記した。

（1）＜鼇頭字畫＞いろは節用

袖珍本　銅版　洋紙1冊

表紙：濃縹色布目地紙に小花唐草模様空押し。
題簽：子持ち枠付き短冊形桃色紙。「＜鼇頭字畫＞いろは節用　津田鎗三編」。
封面：褐色刷り。唐草花模様飾り枠内に二重の枠を造り、中央に書名、右に「津田鎗三編」左に「版權免許＜明治十一年三月十八日＞＜同年六月廿五日刻成＞高山堂藏版」と記す。
内題：＜鼇頭字畫＞いろは節用」。尾題、柱刻とも同じ。尾題には「終」の一字が付く。
丁付：下方オモテ側にあり。凡例には無し。一～四、一～百五、奥ノ一、二。丁数：1＋4＋105＋2。計112丁。
本文：楷書体、カタカナ、早引き、両点方式。タテのみ罫線あり、8行8段。
刊記：終丁ウ匡郭内右方に「版権免許　明治十一年三月十八日／刻成發兌　同年六月廿五日」と年記を出し、左方に「篇（まま）輯者　第四大區十七小區牛込早稲田南町五十四番地・津田鎗蔵／出版人　第一大區七小區桶町七番地・中村熊治郎」と、編輯者・出版人を挙げる。年記の下に小枠があり定価その他を記してあったようであるが、削られ痕跡のみが残っている。続く2丁は、上方に「書肆」として日本橋通一町目・須原屋茂兵衛～甲州甲府・内藤傳右エ門の48名の各地書店を住所付きで列記する。
頭書：「鼇頭字畫」と題し國字篇（俤～鰒）、借字篇（若～且）、誤字篇（仮～鮒）、以下篇立てがはっきりしなくなり、偽字、肖畫篇等に分けて漢字を挙げ、各字について説明する。
＊凡例：明治十一年六月二十五日　編者識に続き、「文字活用」（讀声同クシテ意味ノ異ナルもの＝同訓異義）、「二音活用」（懲役：チヤウエキ）（役人：ヤクニン）のように漢音・呉音等の違いで使い方が異なる例を若干あげ、末に「粟津泉洲閲、津田鎗三編輯」とある。これらは先行する往来物の付録や字書類に時に見られるもので、独自と言うわけではない。
＊節用集を名乗るものでカタカナ・楷書体のものは稀。また、イロハ分けの音節数表示が一と二しか無い。例えばイ一が、イ以、イ易に始りイロ色、イハ岩…イロリ爐、ウ（まま）ロコ鱗…イハンヤ況…イトケナシ幼…イトマゴヒス辭と続き、イ二がイヽ怡々、イバ射場に始り、イヰキ異域、イロカ色香…イロトル彩色…イトマゴヒ暇乞…イロニマヨフ迷色と続き、イノチナガラヘ存命に終わっている。これは音節数では無く漢字表記の数：一字、二字で分けて排列してあるためで、凡例冒頭には「此書雖載日用急務之言語熟字、唯欲其簡且便、是以擧一字二字之者、畧其餘矣」とある。外題や内題角書きに言う「字畫」とはこのことである。
(2) 眞草節用集
洋紙3ツ切、銅版横本1冊
2＋240頁＋奥。
刊記：後ろ見返し子持ち枠匡郭内。右に「明治廿三年九月　日印刷／同年九月　日出版／版權所有」と年記を出し、界線を置いて左に「編輯者　津田鎗蔵・京橋區南鍛冶町廿一番地／印刷兼發行者　井上勝五郎・京橋區南紺屋町一番地」、さ

らに界線を置いて左に「東京賣捌書肆」として小林喜右衛門、辻岡屋文助、上田屋榮三郎、大川屋、山口屋藤兵衛、金櫻堂、春陽堂、明進堂の8軒を列記し、最後に全國書肆と記す。
本文：有界9行、早引方式。い一・以、意、怡、威、依～す八・すいくわひやうたん（水火氷炭）＜ママ＞、ずるずるべつたり（行々為別）。
※憲法、警察、教育、学校、学制等アレド新語、時代語極少シ。
(3) ＜新選＞早引節用集大全
(A) 中本二ツ切　横本　薄様刷銅版1冊
題簽：(正) 子持ち枠付き短冊形白紙。中央に「＜新撰＞早引節用集大全」、右に「眞草両體」左に「改良無比」。(副)「標目」としてイロハ分けの標目を10行5段に示す。
封面：赤色紙、飾り枠内中央に「＜版權所有＞新撰早引節用集大全」の書名等を出し、右に「小田切東潭校正／津田秀林編輯」、左に「東京・三松堂松邑氏版（印記・三松堂）／松榮堂大草氏版（印記・松榮堂）」と記す。
序：赤色飾り枠・赤色刷漢文体（明治二十四年春二月・鴻齋居士石英）。
内題：＜新選＞早引節用集大全／編輯者　津田鎗藏」。
刊記：終丁オ本文末8行目以下に「明治廿四年二月廿三日印刷／仝年仝月廿六日出版「版權所有」／發行兼印刷者　松村孫吉・京橋區弓町十二番地／仝　大草常章・日本橋區大傳馬町二丁目十四番地」とあり、ウラに「編輯者　津田鎗藏・京橋區南鍛冶町廿一番地／發賣所松榮堂書店・日本橋區大傳馬町二丁目十四番地」、界線を置いて左に「賣捌所」として日本橋區の出雲寺萬次郎～水野書店、上田屋本店、榊原友吉、目黒支店、上劦前橋の髙橋煥乎堂、仝高崎の吉田煥乎堂までの7軒の書肆を住所付きで列記する。4＋2＋346（三百二十九、三百四十）頁。
本文：早引き方式、有界11行。い一・伊、以、意～す十・(すうみつこもんくわん）樞密顧問官、(すんてつひとをころす）寸鉄殺人。
＊縹色表紙の洋紙・入れ紙本もアリ。
(B) 大正2年版
緑色クロス装、薄様。題簽：書名右脇の「眞草」が「眞艸」となる。
封面：(A) を基に改変。子持ち枠付き白紙。中央に大きく篆書体で書名、右に校正者小田切と編輯者津田の名、左に「東京　三松堂松邑藏版」と発行元を記す。序は黒字。
刊記：終丁オ、(A) で7行目に位置していた尾題を新しく彫りなおし最終行に持って行き、ウは新刻。右方に「明治貳拾四年二月廿三日印刷／仝年二月廿六日出版／大正二年一月二日訂正印刷／大正二年一月五日訂正發行」と年記を出し、重線を置いて左上に「版權所有」、下方に「編輯者　津田鎗藏／發行兼印刷者　松邑孫吉・京橋區南鍛冶町一番地／發兌元　松邑三松堂・電話京橋一二七六番／振替口座七九三四番」と記す。右下に「改正定價八拾錢」の青ゴム印を捺す。山田目録にナシ。
(4) ＜鼇頭漢語＞實用いろは字典

袖珍銅版薄様1冊
表紙：クロス装、黒、笹色、芝翫茶の3色あり。
封面：赤または桃色紙、飾り枠内を重線でタテに3ツ割。中央大きく「＜鼇頭漢語＞實用以呂波字典」、右に「小島安太郎校閲／津田秀林編輯「千里必携」」、左に「東京翰香堂發兌」と記す。これは淡香色布目地紙の袋と同意匠である。袋には右上に「翰香堂杉本印」の名入りの大型魁星印、左下に「杉本書房」の小型朱印がある。
題辞：赤枠に黒字のものと赤字のものとがあり、「翰香堂杉本氏製本印」の朱印を摸刻する。次いで凡例とイロハ分け標目があり、次丁から本文に入る。
内題：＜鼇頭漢語＞實用いろは字典／津田秀林編輯」。尾題：（同）終」。6＋322頁。
刊記：終丁ウ子持ち枠匡郭内。右に「明治廿五年六月十五日印刷／仝年仝月十七日出版」左上に「版權所有」の印形を置いて、下方に「編輯者　東京市京橋區南鍛治町廿一番地・津田鎗藏／發行者　東京市日本橋區室町三丁目六番地・杉本七百丸／印刷者　同京橋區南鞘町十三番地・渡邉直之」とある。
本文：子持ち枠匡郭付き、有界6行、早引き方式。い一・謂、頤、偉～す八・（すんいんをゝしむ）惜寸陰、寸善尺魔、す九・（すいじやうけいさつ）水上警察。鼇頭も早引き方式、無界。い一・以、伊、意～す四・（酔）態、水害、（水）損。項目の下にカタカナで意味を付す。例：は六・（はくぶつがく）博物學ヒロクモノヽリヲシルガクモン、ゑ四・（ゑんぜつ）演説コトガラヲノベキカス。イロハ各項一に単字を列記し、末に「以上万葉假名」と注す。
（5）＜袖珍正字＞大成會玉篇（再版本）
（A）1冊本
黒紫色布張表紙　袖珍本〔薄様〕刷銅版1冊。　題簽欠。
封面：赤紙。「十八史略字類大全」「十八史略字引大全」等9点の正価付き「松榮堂藏版書目」。
目次：＜袖珍正字＞大成會玉篇目次」、「目次畢」。次いで検字」、四聲平仄韻字例」があり、「明治十七年八月板權」の印形摸刻で終る。
内題：＜袖珍正字＞大成會玉篇／津田鎗藏編輯」。尾題：（書名同）終」。
柱刻：上に大きく「會玉」、重線を置いてオ側に「見角部」のように部首の初丁の標目、同じく下方に丁付を出し、重線を置いて下に「萬里堂」の堂号。
丁付：一～十六、一～二百。丁数：16＋200＋奥。
本文：画引部首別、一部～龠部。有界7行9段。
刊記：後ろ見返し子持ち匡郭内。右に「明治十七年八月二日版權免許／同廿五年九月十七日再版印刷」、重線を置いて左に「発行兼印刷者　東京日本橋區大傳馬町二丁目十四番地・大草常章／編輯者　同京橋區北槙町十七番地・津田鎗藏／賣捌所　上州前橋曲輪町二番地・高橋煥乎堂／同　上州高崎田町二丁・吉田煥乎堂／同　東京大傳馬町二丁目十四番地・大草松榮堂」と記す。
（B）2冊本

濃紺色無地表紙。題簽：子持ち枠付き短冊形白紙。「＜袖珍正字＞大成會玉篇乾（坤）」

封面：（A）本と同じく「郵税不用」とある9点の「松榮堂蔵版書目」であるが、飾り枠の意匠が異なり、また、「第二版初學日本文典」の正価が（A）金五十銭に対し本書は六拾銭、「＜校訂精註＞十八史略校本」の正価が、（A）の金壹円に対し本書では金壹円十銭とある。両方とも本書の方が若干値上がりしており、（A）より後の発売と見てよい。

前付き：扉題として「＜袖珍正字＞大成會玉編乾（坤）」と篆書体で大きく出し、（上）は人を乗せた人力車や2頭立ての馬車を前景とする皇居二重橋の折り込図、「引用書目」（日本外史～謝選拾遺24点、有界8行3段）がある。次いで目次、検字、四聲平仄韻字例、「明治十七年八月板權」の摸刻印記が計16丁ある。

内題、尾題、柱刻：（A）に同じ。

刊記：発行兼印刷者大草常章の住所が「東京日本橋區橘町壱丁目壱番地」となっている点と売捌所の大草松榮堂が「同　名古屋市本町三丁目・川瀬代助」に代わっている点が（A）と異なる。

分巻：（上）丁付八十九オまで、（下）扉題、〔八十九ウ〕～二百ウ、奥付。やや杜撰な分巻の仕方である。

（C）明治39年浅見文林堂版

袖珍本　濃紺色布貼表紙銅版1冊

題簽：子持ち枠付き短冊形白紙。「＜袖珍正字＞大成會玉篇　全」。

封面：飾り枠付き桃色紙を重線でタテに3ツ割。中央に書名、右に「岡　古雄／津田忠恕校訂／隅田了古補閲」、その下に「津田秀林編輯」と記し、左に「東京書林　文林堂發行」と出す。

前付：目次、検字等16丁、内題、尾題、柱刻：（A）（B）本に同じ。

刊記：後ろ見返し子持ち枠匡郭内、右方に「明治卅九年九月六日再版／同卅九年九月十日發行」、重線を置いて上に「明治十七季八月弐日版權免許」、下に、「発行兼印刷者　東京市日本橋區大傳馬町二丁目廿一番地・淺見文吉／編輯者　津田鎗藏／發賣元　東京市日本橋區大傳馬町二丁目廿一番地・淺見文林堂（電話浪花二八八九番、郵便貯金振替第壹〇六〇番）」と記す。

＊（A）の後印本である。初版本は未見。

註6．井汲養造編を謳う節用集がある。山田氏目録に記載の無い版を一例として出すと、内題・尾題：＜新撰＞いろは數引大全（外題角書：＜新撰漢語入＞）。半紙3ツ切横本　洋紙活版1冊入れ紙本。赤刷りの「凡例」に、「小冊子ト雖トモ、文字ノ數殆ント三萬ニ近シトス」とあり。有界10行、2行両点方式。い一：伊、已、以～す一〇：翠帳紅閨。明治30年12月7日初、明治39年8月20日十五版、大阪・積善舘石田忠兵衛。九十、九十・九十二、九十九・二百等の飛丁あり。巻末に「積善舘發兌字書目録」があり11点を載せる。前付9丁赤刷：凡例、文字引様～鐵道輸送貴重品運賃表、明治三十三年齢早見表。